

この素晴らしいアークスに祝福を！

指揮官さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

車に轢かれそうだった猫を庇い死んでしまった中学3年生の少年むげんそうすけ夢幻創介は死後の世界でエリスと出会い異世界の存在を知る。そして彼が選んだ特典、それはPSO2NGSの自分のデータの一部分だった。

注意事項

駄文、誤字の可能性大

これらが嫌なら即座にブラウザバックを推奨します

目次

第0話	転生	1
第一話	冒険者登録と出会い	5
第二話	自己紹介	10
第三話	爆裂娘	13
第四話	ドMクルセイダー	18
第五話	爆裂散歩	22
第六話	襲来！魔物種！	24
第七話	浄化の申し子	29
第八話	神々からの授かり物	32
第九話	作戦会議	35
第十話	もう一つの授かり物	39
第十一話	取り調べ	42
第十二話	乱入	45
第十三話	失望	52
第十四話	アルカンレティア	59
第十五話	激闘！ハンス戦！	63
第十六話	激闘！シルビア戦	65
第十七話	漂流者	72
第十八話	ダーカーの襲撃	76
第十九話	ダークファルス【猛獣】（ビースト）	79
最終話	幻創の星（ファンタシースター）	83
Trinity Journey		
一つめの世界		91

助太刀と異物	93
「アニマル戦士の世界	102
アウトランドへの出立	106
追放されたライオン族	110
スパイダー族の牢獄	114
ラベルタスの正体	117

第0話 転生

??? 「夢幻むげん創介そうすけさん。ようこそ死後の世界へ。」

創介 「……………え？」

創介は困惑していた。なにせ車に轢かれそうだった猫を庇い、車と衝突し死んだと思っていたが気づけば不思議な空間に居て目の前には美しい銀髪の美女が居たのだ。

??? 「貴方の死に際の行動……………とても素晴らしかったです。」

創介 「そ、それはどうも……………」

エリス 「私の名はエリス。日本で死んだ魂を導く存在にして異世界では幸運の女神として崇められています。」

「今、貴方には三つの選択があります。」

「天国に行きのんびりぼーっと過ごすか記憶を消して赤子からやり直すか、記憶はそのまま異世界に転生するか。」

エリスは創介に三つの選択肢を出した。

「三つ目の事ですがその世界では魔王と言う存在によって平和を脅かさせているのです。」

創介 「魔王？ドラクエで言うゾーマやバラモスの奴か？」

エリス 「例えるならそんな感じですよ。」

創介 「なら俺、異世界に行きます！」

「その世界に危機が訪れてて人々が怯えているのは黙って見てられっかよ！」

創介はそう言いながら異世界に行く事を決意する。

エリス 「ありがとうございます！ございます！それでは、異世界に行くには好きな特典を持っていきますよ。後、一応なんでもいけますよ」

創介 「なんでも!?じゃあ俺がやってたPSO2NGSのゲームのデータそのまま持っていけるのか!？」

エリス 「一部だけならいけますよ」

エリスは笑顔で言う。

創介「よつしやあ！ならペンと紙ありますか？」

エリス「ありますよ。」

するとエリスは魔法陣を出すと中からペンと紙が出てきてエリスはそれを創介に差し出した。

そうすると創介は紙に自分が持つていく特典を書き、それエリスに差し出した。

エリス「え？」

エリスは紙に書いてある創介の要望に少したじろく。

創介「無理？」

エリス「あ、いえ、これくらいはギリギリ許容範囲内です。」

創介「良かったー」

創介はほつとため息を吐く。

創介が紙に書いた内容とは創介がゲーム内で手に入れたPSO2の最強武器シリーズ、クラススシリーズのカタナのクラスサーベルと、ガンストラッシュのクラスティア、デュアルブレードのクラスグライドを持つていく事(ちなみに某鍵の剣の勇者のように自分の意思で出現させたりしてしまうように消したり敵に捕られても瞬時に戻つて来るようになど便利な機能を付けた。)と自分が愛用しているユニット三種と戦闘支援してくれたり音楽をかけたり出来るマグを持つていく事とダークブラストが使える事と服装は創介のゲーム内のお気に入りのコスチュームにする事だった。

エリス「それでは貴方にはこれらの特典を付与します。」

エリスはパチンと指を鳴らすと創介の隣にはマグが現れ更に創介の服装はゲーム内のコスチュームに変わり、創介は神々しい光に包まれ、やがて光は収まった。

創介「なんだか……凄い力が漲って来たぞ……」

エリス「試しに武器よ出て来いと念じてみてください。」

創介はエリスに促され手を翳し念じると彼の手に光が集まり光纏刀クラスサーベルが姿を現した。

蒼波「おお！」

エリス「それでは異世界行く準備は出来ましたか？」

創介^{イノック} 「大丈夫だ。問題ない。」

PSO2NGSより

{A World Beyond The Sky}

エリスは創介のいかにも準備万端な台詞に少し微笑み詠唱を始める。

エリス「夢幻創介よ。貴方はこれから異世界へと送ります。魔王討伐の為の勇者候補の一人として、魔王を倒した暁には神々からの贈り物を授けましょう。」

蒼波「贈り物？」

エリス「はい。世界を救った偉業に見合う贈り物……例えどんな願いでも一つだけ叶えて差し上げましょう。」

創介「なんでも!?!」

創介はなんでも叶える願いに目を輝かせる。

「さあ、勇者……いえ、アークスよ!数多の勇者候補の中から貴方が魔王を打ち倒す事を祈っております。」

「さあ、旅立ちなさい!」

エリスはそう言い放つと創介は頭上に出現したゲートに吸い込まれていった。

創介は気が付くと石造りの街中に突っ立っていた。

創介「ここが………異世界……！」

今ここに、この世界へと舞い降りたアークスの戦いが今、始まろう
と
し
て
い
た
。

t o b e c o n t i n u e d ……

第一話 冒険者登録と出会い

創介「すげえ……」

創介は目の前の光景に興奮していた。

「獣耳の人も居るし耳が尖ってる人も居る……」

「よし、まずは冒険者ギルドに行くか。」

創介は冒険者ギルドを探しにその場から歩き出した。

冒険者ギルド

いかにもな雰囲気を放つ大きな建物の扉の前に創介は着いた。

創介「ここが冒険者ギルドか。」

創介は扉を開けるとそれは賑やかな光景が広がっていた。

すると…

ウエイトレス「いらつしやいませ！冒険者になる事をご希望なら奥のカウンターへどうぞ！」

金髪のお姉さんが愛想良く出迎えてくれた。

創介「冒険者になりました。」

ウエイトレス「冒険者登録ですね。それではこちらへどうぞ。」

創介はウエイトレスさんに導かれカウンターへと向かう。

「まずは登録手数料が必要で千エリス必要ですよ。」

創介「え」

「ちよ、ちよつと待っていてください…」

創介は自分の服のポケットを漁るといつの間にか入ってあったのか金色のコインが二つ入ってあった。

ウエイトレス「それなら丁度足りますね」

創介「あ、どうぞ」

創介はウエイトレスに2枚の金色のコインを渡した。

その後創介は書類に身長、体重、年齢など記入した。

ウエイトレス「それではこの魔道具に手を翳してみてください。」

創介「判りました。」

創介はウエイトレスに促されるまま魔道具に手を翳した。

ウエイトレス「創介さんのステータスは……………ええ!」

創介「どうしたんですか!」

ウエイトレス「創介さん! 貴方何者ですか!?! 体力と魔力と器用さと
守備が平均値よりとても高く特に力のステータスがずば抜けて高い
ですよ!!」

すると冒険者達が歓喜の声を上げる。

冒険者A「おお! またすげえ奴が来たのか! 歓迎するぜ!」

冒険者B「これなら魔王討伐は近いかもな!」

ウエイトレス「あら?」

するとウエイトレスは何かに気づく。

創介「どうしたんですか?」

ウエイトレス「見た事もない職業があります……………職業名は守護輝士
?」

守護輝士ガーディアン、それはPSO2に登場する固有の職業。簡単に言えば許
可も無く探索に行けたり事象の処理、戦闘などは全て守護輝士ガーディアンの判断
で決める事が出来るのだ。

創介「守護輝士ガーディアンにします。」

ウエイトレス「え? 良いんですか?」

創介「守護輝士ガーディアンでお願いします。」

ウエイトレス「分かりました。それでは守護輝士ガーディアンの夢幻創介さん!
貴方を歓迎します!」

冒険者達「ウオオオオオオオオ!」

平原

雲一つないのどかな平原。創介はジャイアントトード討伐のクエ
ストを受け目的地へ向かう途中自身の冒険者カードを見ていた。

創介「……………やっぱりこのスキル、PSO2の物だ。」

創介は自身の冒険者カードに最初から習得されていたスキルを見ていた。使用すると高速の移動と斬撃が繰り出せるカタナコンバットや無条件に攻撃力が上がるアベレージスタンス、二段ジャンプが出るネクストジャンプなど、ブレイバー、フアントム、バウンサー、エトワール、ラスターに関するスキルが習得されてあったのだ。

しかもフォトンアーツも習得されており後継クラス専用のフォトンアーツも習得されてあったのだ。しかもフォトンアーツの一部は最大限にまでパワーアップをしていたのだ。例えば敵へ突進しすれ違いざまに斬りつけその後移動ステイックを倒すと倒した方向に一閃する紅蓮鉄閃グレンテッセンは突進中は無敵になり相手の攻撃を無効化する事が出来るようになったりなど一部のフォトンアーツは強化を受けたのだ。

創介「……………女神様ありがとう。」

空を見ながらエリスにお礼を言う創介は目的地へ着いた。

??? 「ぎゃあああああ!!」

すると遠い方から声が聞こえてきた。

創介「!」

創介は声のする方へ走って行き声のする方へ辿り着くとそこには信じられない光景があった。

創介「そんな……………なんで……………」

「なんでダーカーがこの世界に居るんだ!?!」

そう、緑のジャージの少年と粘液まみれの青髪の美女がダーカーの

群れに追われていたのだ。

ダーカー。それはPSO2に登場する惑星調査隊アークスの最大の敵にして宇宙を蝕む闇の存在。【深淵なる闇】と言う邪悪な存在によって生み出された危険な存在が異世界に存在していたのだ。

緑のジャージの少年「おいアクア！なんでPSO2のダーカーがこの世界に居るんだよ！」

アクア「知らないわよカズマ！カエルに食べられて挙句の果てにはダーカーが出て来るってどう言う事よ！私だって判らないわよ！」

カズマ「んなこと言ったつて…うわあ！」

アクア「カズマ！」

カズマと言う少年は盛大に転んでしまう。

そしてカズマの背後には蟲型ダーカーのデイカーダが迫る。

カズマ「あ…あ…あ…あ…あ…あ…」

カズマは恐怖で足が震えていた。

デイカーダはカズマに鎌を振り下ろそうとしたその時！

創介「波濤鱗道！」
ハトウリンドウ

PSO2ジアニメーションより

〔potential ability〕

突如デイカーダは横から波のような斬撃に斬り裂かれた。

カズマとアクアは飛んできた方角へ目を向けると…

そこに彼は居た。

蒼いモッズコート、黒いズボン、そして彼が持つ身の丈程の銀色のサーベル。

カズマは二つの確信を持った。彼が助けてくれた事と、彼が自分と同じ転生者だと言う事を…

創介「大丈夫か!？」

カズマ「あ、ああ。」

創介「それは良かった」

創介はカズマの身の安全を取るとダーカーの群れに立ちはだかる。

創介「行くぜ！」

創介はカタナコンバットを発動しダーカーの群れに突撃する。創

介がダーカーの群れに激突する寸前に創介は消えたと思いきやダーカーの群れに無数の光の線がダーカーを斬り刻むように光が走り、気付けば創介はダーカーに背を向け、クラーズサーベルをゆつくりと納刀する。創介がクラーズサーベルをカチンと納刀するとダーカーの群れはバラバラに斬り裂かれ黒い霧となつて消滅した。(↑この描写はわかりやすく言えばデビルメイクライのバージルの次元斬・絶のよくな技だと思ってください。)

カズマ&アクア「すつご……」

カズマとアクアは創介の凄まじい強さに度肝を抜かれた。

これが、創介が原作主人公、カズマとの邂逅であつた。

t o b e c o n t i n u e d ……

第二話 自己紹介

冒険者ギルド

創介がカズマとアクアを救出した後、創介はアクセルに戻りギルドにダーカーの事を話した。

ウエイトレス「ダーカー……ですか？」

創介「ああ。未確認のモンスターを見つけたらすぐに俺に言ってくれ。それと、あいつらはとても危険な存在だ。可能なら全国に言っておいてほしい」

ウエイトレス「判りました。この事は全国のギルドマスターに伝えておきます。」

創介「ああ。頼んだぜ。」

創介そう言って食堂へ向かう。

創介「ギルドにダーカーの事を伝えておいた。それと……」

「なんでお前は何も無かったかのようにな飯食ってんだよ。」

創介の視線の先にはアクアが美味しそうにご飯を食べていた。

アクア「良いじゃないの。あんたのお陰で助かったしおまけにクエストクリアも出来たし！」

カズマ「お前な……」

創介「まあ良いか。自己紹介と行こう。夢幻創介だ。よろしく頼むよ。」

カズマ「佐藤和真だ。」

アクア「私は水の女神にしてアクシズ教の御神体、アクアよ！」

創介「女神？ エリスと知り合いか？」

アクア「エリスですって!?! あんたエリスと会ったの!?!」

創介「え？ そうだけど……」

アクア「キーー！ あいつつたら後輩のくせにやけに崇拜されてて凄いムカつくのよ！」

創介（アクアが先輩でエリスが後輩……なるほどなー）

カズマ「なあ創介。お前も転生者ならどんな特典を選んだんだ？」
カズマが創介にどんな特典を貰ったのか尋ねる。

創介「俺の特典はこのユニットとこの服装にしてもらった事とこの
マグとあるかと……」

「この武器とこいつを含めて三種の俺がやってたPSO2NGSつ
て言うゲームのデータの一部分なんだ。」

創介はクラスサーベルを見せながらそう言う。

カズマ「マジか！羨ましいじゃねえか！」

創介「んで、カズマの特典は何だ？」

カズマ「選ぼうとしたけどこいつが雑な対応したり俺の死を笑った
りしたから腹いせにこいつを選んだ。」

アクア「ちよつと！雑な対応ってなによ！」

創介「カズマの死を……笑った？」

アクア「そうよ！カズマはね？シヨック死なのよ？」

創介「シヨック死……？」

アクア「そうなのよ！車に轢かれそうだった女の子を助けようと
思ったら実は車は車じゃなくてトラクターだったしカズマは女の子
を突き飛ばした後シヨック死して死んじゃったのよ！おまけにシヨ
ンベン漏らしてねーあー思い出すだけで笑いが止まらないわ！アツ
ハツハツh…」

創介「………巫山戯るな」

すると突然創介はアクアの胸ぐらを掴み、クラスサーベルの剣先
をアクアの喉元に突き付ける。

創介「そんな口でよく神を語れるな。」

アクア「え？ちよつと創介？」

創介「人の死を笑うな。」

「カズマだってその女の子を助けようとしたんだぞ？」

「そんなカズマをよく笑う事が出来るな」

すると創介にダーカーと似た赤黒いオーラが現れる。

「人の死を笑うお前に、神を名乗る資格は無い」

アクア「ちよつとまって、なにその禍々しい気配、と言うか顔が怖

い！わかった！わかったから！カズマに謝るからお願い助けて！助けてください！お願いしm…」

創介は無言でアクアの命乞いに耳を貸さずクラーンスサーベルを振り下ろした。

だが、創介はクラーンスサーベルの刃とアクアの脳天が微かに動くだけで刃が当たる所で振り下ろすのを止め、アクアはあまりの恐怖で気絶しその場から倒れる。

創介「カズマを笑った事を土下座で謝るならお前を許してやる。」

創介はアクアが気絶しているにも関わらず赤黒いオーラを晴らしながらそう言い放った。

カズマ「あの、創介さん？」

創介「……………悪いが今はこのクズのせいでもともと機嫌が悪い。宿屋に行く。」

創介はカズマに宿屋代（一人分）を渡しながら去って行った。

t o b e c o n t i n u e d ……

第三話 爆裂娘

創介がアクアを粛清して翌日。

冒険者ギルド

アクア「申し訳ありませんでした。」

アクアは昨夜でとある悪夢を見てカズマに土下座をしていた。

創介「ようカズマ。やあアクア^紙。」

カズマ「あ、創介。」

創介「なにしてんだ？」

カズマ「ああ、パーティメンバーを集めているんだ。」

創介「へえー。じゃああんたのパーティに入るよ。」

カズマ「え!?!良いのか!?!」

創介「ああ。ご覧の通りクズ紙は改心しているし入ってやるよ。」

カズマ「おお!じゃあさっそk…」

???「募集の貼り紙、見させてもらいました。」

創介達が声のする方へ目を向けるとそこには赤い服と黒いマントを着たいかにも魔法使いのような服を着て眼帯を着けた紅い瞳の少女が居た。

創介「君は？」

創介は何者かと問うと少女はマントを翻し、

めぐみん「我が名はめぐみん!アークウイザードにして究極の攻撃

魔法、爆裂魔法を操る者!」

めぐみんと言う少女はそう名乗った。

創介「なるほど……」

すると創介はクラスサーベル、クラススティア、クラスグラインドを出現させ空中に留めてポーズを決め、

創介「我が名は夢幻創介!世界の始まりの光を掴みし者にして、魔王を斃さんとする者!」

めぐみんと合わせて名乗りを上げる。

めぐみん「ハアアアア!」

するとめぐみんは眼を紅く輝かせていた。

「なんですか今のかっこいい台詞は!?!と云うかなんですかその三つの武器は!?!私の名乗りに合わせてくれたのはあなたが初めてでしたよ!?!それに世界の始まりの光とは一体!?!」

めぐみんは興味津々で創介に問う。

「あの……もう一度……やってみてくれま……」

するとめぐみんは突然倒れた。

創介「おい!?!大丈夫か!?!」

めぐみん「もう3日も食べてません……何か食べさせてくれませんか?」

創介「あ、ああ。びっくりさせんなよ。」

数分後、創介の奢りにめぐみんは美味しそうにご飯を食べていた。

創介「そう言えばその眼帯はどうしたんだ?」

創介がめぐみんに眼帯の事を問うと、

めぐみん「ツフ、これは我が強大なる力を抑えるマジックアイテム。もしこれが外される事があれば、その時は世界に大いなる災厄が訪れるであろう……」

めぐみんはそう答えた。

カズマ「封印みたいな物か?」

めぐみん「まあ嘘ですが。単にオシャレでつけているだけ……」

創介「とりあえずかつこよく付けていると言う事だけは判った。」

アクア「二人に説明すると彼女は紅魔族って言う種族で生まれつき高い知力と魔力を持ってて大抵は魔法使いのエキスパートだけどみんな変な名前を持っているわ」

アクアは二人に説明する。

めぐみん「変な名前とは失礼な私から言わせればみんな変な名前ですよ?」

創介「じゃあ両親の名前は?」

創介はめぐみんにそう問うと、

めぐみん「母はゆいゆい、父はひよいぎぶろー！」
めぐみんはかつこよく言いながらそう教えた。

創介「……………この嬢さんの種族は魔法が得意なんだな？」

めぐみん「おい！私の両親の名前について言いたい事があるなら聞こうじゃないか！」

平原

そんなこんなでめぐみんの技量を試す為にジャンアントトードの討伐クエストを受け、平原に来ていた。

めぐみん「爆裂魔法は最強魔法。その分発動には時間がかかります。それまで足止めをお願いします。」

創介「OK。なら俺はあっちのカエルを…っておいアクア！なに突っ走って?!」

アクア「あの時の恨み、地獄で懺悔なさい！喰らいなさい！ゴツトレクイひゅぐ!」

アクアはなにか技を出そうとしたのだがカエルに喰われてしまった。

カズマ「流石は女神、身を挺して時間稼ぎをするとは…」

創介「あいつは最後に助けるか。」
すると周囲の空気が震え出す。

「こりやあすげえフォトン…いや、魔力だな。」

めぐみん「黒より黒く、闇より暗き漆黒に、我らが深紅の混淆を望みたもう。覚醒の時来たれり、無謬の境界に落ちし理、無行の歪みとなりて現出せよ！踊れ、踊れ、踊れ、我が力の奔流に望むは崩壊なり。並ぶ者無き崩壊なり。万象等しく灰燼に帰し、深淵より来たれ！これが人類最大の威力の攻撃手段、これこそが究極の攻撃魔法！エクस्पロージョン!!!」

ジャイアントトードを中心に凄まじい爆発が起き、爆発地点には大きなクレーターが出来た。

カズマ「すっげえ……」

創介「良い威力じゃねえか」

創介とカズマはめぐみんの放つ威力に感動していると、ダーカーの群れが現れた。

創介「ダーカー！また出たのか!？」

「めぐみん！一旦逃g…」

創介の視線の先にはうつ伏せで倒れているめぐみんが居た。

めぐみん「実は限界を超える魔力を使うので身動き一つ、取れません……」

創介「カズマ、めぐみんをおぶってやってくれ。ダーカーは俺に任せろ。」

カズマ「あ、ああ。」

カズマはめぐみんをおんぶして創介はダーカーの群れに突撃した。

創介は銃剣のクラスティアを持ち、銃剣と魔力で生成した剣を持ち、銃剣と魔力で生成した剣を組み合わせたラスター専用フォトンアーツのブランドエクステンションで華麗に斬りつけダーカーを斃すがいつの間にか囲まれてしまう。

カズマ「創介!」

だが創介は武器を飛翔剣のクラススグライドへ持ち替え周囲に魔力で生成したフォトンブレードを展開させ爆発と同時に四散させるフォトンアーツのスターリングフォールを使用して上空へ飛び上がりながらダーカーを全滅させた。

創介の戦い方を見てめぐみんは眼を紅く輝かせていた。

その後、アクアを救出して残りのジャイアントトードを斃してクエストクリアしてアクセルの街へ戻った。

アクセルの街

創介「なあめぐみん、お前他の魔法って使えるのか?」

創介がめぐみんに他の魔法が使えるかと尋ねると、

めぐみん「いえ、使いません。私は爆裂魔法しか使いません。使えないどころか使わないと出たのだ。

創介「そうか。なあカズマ、彼女をパーティーに入れないか？」
カズマ&めぐみん「え？」

創介「彼女は見込みがある。頼りになるかもな。」

カズマ「そこまで言うなら仕方ねえな……」

めぐみん「あ、ありがとうございます！」

冒険者ギルド

創介達は冒険者ギルドに戻った後報酬を貰い、夕食を食べていた。

??? 「ちよつと良いだろうか？」

すると声をかけたのは金髪の美しい女騎士が居た。

t o b e c o n t i n u e d ……

第四話 ドMクルセイダー

??? 「パーティーメンバー募集の貼り紙を見たのだがここで合っているだろうか。」

創介達の前に現れた金髪の女騎士はそう言った。

カズマ 「あー、まだパーティーメンバー募集してますよ。」

カズマはそう言うのと

??? 「是非私を！是非、この私をパーティーに！」

創介&カズマ 「え」

創介とカズマの声が重なる。

??? 「その君はあのダーカーと言う正体不明のモンスターを知っていると見た。ならばこの私を是非パーティーン……」

創介&カズマ 「お断りします！」

??? 「んなあ!？」

二人は金髪の女騎士の頼みをキツパリ断った。

翌日、冒険者ギルド

創介達はその後朝食をとっていた。

すると創介達の前に昨日あった女騎士の友達のクリスがやって来てカズマはクリスに盗賊のスキルを教えて貰った。だがカズマがクリスのパンツを剥がしたと聞き創介はカズマをボコボコにした。そんなカズマを引き連れていた創介はクエストに行こうとすると……

『緊急クエスト発令！街の中に居る冒険者の各員は至急アクセルの門の前へ集まってください！』

創介 「緊急クエスト？」

めぐみん 「そういえば今日はキャベツの収穫の時期ですね。」

創介 「……………え？」

創介はあり得ないワードに自分の耳を疑う。

アクア 「あー……………説明するより行った方が早いわ。」

創介はアクアに促され門の前へ行く。

アクセルの街門の前

創介達冒険者達は身構えていると遠方から緑色の何かが迫って来た。

創介「ハア？」

創介は思わず声を漏らす。なにせキャベツが生き物のように動き、飛んできたのだ。しかも凄まじい数で。

アクア「この世界のキャベツは飛ぶわ、サンマは畑で採れるしあなたが居た世界とは全然違うわ。気持ちはわかるけどキャベツは美味しいしレベル上げには最適よ。」

創介「そ、そうか……」

創介はこの状況を受け入れるしかないと悟ったのかクラスグライドを持つ。

「こうなりやヤケだ！てめえら全員美味しく食ってやらあ！」

創介はそう言つて単身突撃した。

「舞え！刃よ！」

創介はそう言い放つと自分を中心にフォトンブレードを周囲に散開させるフォトンアーツ、デイスパースシュライクを放ち創介のそばを通つたキャベツは瞬時に斬り刻まれた。

すると……

冒険者達「うわああああ!!!」

創介「!?!」

創介は悲鳴のする方へ眼を向けると目に映つたのはダーカー達が冒険者達を襲っている光景だった。

創介「また出やがったのか！」

創介はキャベツを顧みず冒険者達を助けに武器をクラスサーベルに持ち替えて救助に向かった。

創介はダーカーに襲われている冒険者達を救助しながらダーカーを退いていた。

すると……

??? 「にゆうううう！」

創介は謎の奇声に眼を向けるとなんと先程の女騎士がダーカーの攻撃を受けていたのだ。しかもわざとで。

「ハア!? あいつ頭でも逝ったのか!? てかなんでダーカーの攻撃受けてもなんともねえんだよ!?!」

そう。本来ダーカーに攻撃された者はダーカー因子に侵食されるのだが女騎士は何故か侵食されないのだ。

創介は驚きながらも女騎士を攻撃しているダーカーをクラスサーベルで斬り裂き女騎士を助けた。

女騎士「ああ貴様! 余計な事を!」

創介「このドMが! あいつらダーカーは危険な存在なんだよ! なんで思い切り攻撃受けてんだよ!」

女騎士「仲間を守るのはクルセイダーのやくm:」

創介「どこがクルセイダーの役目だ!?! てめえはただの私利私欲の為に動くゴミクズ野郎だ!!!」

女騎士「ご、ゴミクズ……」

女騎士は創介渾身の叱りを受けて顔を俯く。

その後、創介はキャベツ達を狩り、無事にクエストは終了した。

冒険者ギルド食堂

創介「………この世界のキャベツってこんなに美味しいんだな。」

創介はこの世界のキャベツの美味さに感心していた。

一方女騎士はと言うと創介の言葉が効いたのか暗い顔をしながらキャベツを食べていた。

「……パーティーに入れてやるよ……。」

女騎士「え?」

創介「お前はダーカーの攻撃を受けてもダーカー因子に侵食されなかった。お前には見込みがある。」

「でも、ちゃんとやれよ?」

女騎士「……判った。私の名はダクネス。よろしく頼む。」

女騎士はダクネスと名乗り創介達は魔王討伐に尽くす為奮闘する

第五話 爆裂散歩

キャベツ収穫のダーカー襲撃事件で創介はダクネスがダーカー因子に侵食されなかったのをきっかけにダクネスをパーティーに入れて2日後、創介達はクエストを受けようとしたが近くで魔王軍幹部が住み始めて弱いモンスターが逃げたしまい高難易度のクエストしか無かったがめぐみんには爆裂散歩と言う日課があると知った創介は暇潰し程度にめぐみんと共に爆裂散歩と言う日課に付き合っていた。

めぐみん「創介さん」

めぐみんは道中で創介に声を描ける

創介「？」

めぐみん「創介さんと初めて会った時の名乗りで気になっていたのですが世界の始まりの光とは一体？」

創介「ああこの武器達の事だよ。」

創介は指パツチンをすると創介の周囲に三つの武具が現れる。

めぐみん「その武器は？」

創介「この武器達は光纏、またの名をクラスって言うんだ。」

めぐみん「光纏？クラス？」

めぐみんは聞いたことのない言葉に首を傾げる。

創介「この武器達は元々闇征、又はアジェルと呼ばれてて自らの全てを引き換えにしても世界を護る決意が込められていた武器で、その武器が世界の始まりの光を纏ったのがこの武器クラスなんだ。」

めぐみん「おお！即ち世界の始まりと同時に生まれた武具、と言う事なんですね！」

創介「まあそんな感じだな。」

するとめぐみんは丘の上にある不気味な城を発見する。

創介「随分と古い城だな。」

めぐみん「アレにしましょう！もし壊しても誰も文句がなさそうなので！」

創介「そうだな。思いっきりやれ！」

めぐみん「はい！」

するとめぐみんは杖を構えて詠唱を始め、エクスプロージョンを放つと城に虹色の光が一瞬走ると城は爆炎に飲み込まれたが城は原型を保っていた。

創介「随分と丈夫な城だな。」

めぐみん「あの創介さん、おぶってもらえないでしょうか？」

創介「あ、ああ。よいしょっと、帰るぞ。」

こうして創介とめぐみんの日課は始まった。

一方、カズマとアクアは毎日アルバイトに励み、ダクネスは暫く実家に帰り筋トレをしいった。

そして特にやることがない創介はめぐみんの爆裂散歩に毎日付き合っただけで、その度に城へ爆裂魔法を放ち続けた。

そして約一週間が経ってアクセルにデュラハンがやって来た。

そして用件とは……

デュラハン「俺は一週間前からこの近くに越して来た魔王軍幹部の者だが……」

「毎日毎日俺の城に爆裂魔法を撃ち込む奴はだれだああああ!!!」

なんと、そのデュラハンは魔王軍幹部でめぐみんが毎日撃っていた城に住んでいたのだ。

t o b e c o n t i n u e d ……

第六話 襲来！魔物種！

創介はめぐみんを見て察した、犯人は自分達だと。

めぐみんも自分や創介も犯人だと気付き前に出て、創介も続くように前に出る。

デュラハン「お前らか……お前らが俺の城に……ん？」

するとデュラハンは何か言いかけたが創介を見て目を丸くしていた。

創介「え？俺になんか用ですか？」

デュラハン「なるほどな……お前が奴が言っていた創介と言う奴か……」

するとデュラハンは妖しい光を放つ薔薇の様な花を取り出す。

創介「エフィメラ!？」

創介はその花の名を驚きながら口に出す。

デュラハンはその花を握り潰すとエフィメラは砕け散り、魔法陣が現れ、魔法陣から魔物種達が現れた。

アクア「ちよつと何なのアレ、今まで見た事も無いんですけど!？」

めぐみん「創介さん!」

創介「めぐみん、下がってる、あいつらは俺がやる。」

創介はそう言いながらクラスサーベルを取り出し、大きく踏み込み魔物種の大群へ突撃した。

創介はクラスサーベルを巧みに操り魔物種達を斬り伏せていき、やがて全滅させた。

デュラハン「ほう……中々やるではないか」

創介「そりやどーも。それと、お前、何故エフィメラを持っている？」

創介はクラスサーベルをデュラハンに突き付けながら問う。

デュラハン「ほう、この花はエフィメラと言うのか。まあいい、その質問については答えんぞ。だが……」

「この俺を倒せば教えてやらんでもない」

デュラハンは馬から降りて大剣を構える。

創介「約束、守れよ？グレンテッセン紅蓮鉄閃」

すると創介は居合の構えを取り、大きく踏み込みデュラハンに突撃する。

創介はすれ違いざまにデュラハンを斬りつけ、デュラハンはすかさず大剣で防ぐがデュラハンの背後に居る創介は力を込め抜刀斬りを放つ。

デュラハン「グハア！」

デュラハンは怯み創介はすかさず追撃を繰り出す。

創介「シユンカシユンラン俊華瞬乱！」

創介はクラーサーベルを鞘に納め、呼吸を整え、抜刀と同時に一突き、横薙ぎ払い、振り下ろし、そして渾身の力を込めて斬り上げ、ベルディアを打ち上げる。

創介はクラーサーベルを3回素振りをする^と創介の背後に浮くパーツのような物体がクラーサーベルと合体し巨大なサーベルとなり、創介はクラーサーベルを上に掲げると周囲の魔力を吸収して巨大な光の刃が出現する。

創介「カザンナデンコ必殺奥義、火斬撫子！」

デュラハン「グワアアアアアアアア!!!」

創介の渾身の力を込めた振り下ろしはデュラハンを一刀両断した。

創介「……答える。エフィメラは誰から貰った？」

デュラハン「……良いだろう。俺を倒した褒美に教えてやる。」

デュラハンは力尽きそうにも関わらずに語りだす。

「俺はここの近くにある廃城に住み始めた頃、魔王の側近と名乗る者が訪れた」

「そいつは俺にある依頼を出したのだ。」

創介「ある依頼……？」

デュラハン「夢幻創介と言う少年を捕らえよ。さすれば魔王軍の勝利は確実になる。と……」

デュラハン「そいつはあエフィメラの花を俺に手渡し去っていった。」

「そして、そいつの名は……」

アクア「セイクリッド・ターンアンデッド！」

デュラハン「ギイヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

創介「ハア!?ちよつと!?」

アクア「お手軽よ創介!後は水の女神のこの私に任せなさい!」

デュラハン「アアアアアアアアアアア!!!」

アクアは創介の制止など聞かずにデュラハンは浄化され、召されてしまった。

創介^{オルガ}「何やってんだアク^{ミカ}アアアアアア!!!」

アクセルの正門前に創介の怒号が大きく響いた。

??? 「あーあ。やられちゃったか。」

アクセルの外壁の上から静かに創介を見つめる謎の男。

「流星は守護輝^{ガーディアン}士様。まさかこれほどとはねー」

「まあ今も良いけどもう少し泳がせておくとしようかな。」

「精々頑張ってくれよ?」

「センパイ」

謎の男は創介をセンパイと呼び、赤黒い光に包まれると最初から居なかつたかのように姿を消した。

冒険者ギルド

カズマ「創介、お前すげえぞ！」

めぐみん「はい！流石は世界の始まりの光を掴みし者です！」

ダクネス「まさか魔王軍幹部を倒すとは……これなら魔王討伐は夢ではないかもしれないな。」

創介「ありがとうみんな。」

現在冒険者ギルドでは魔王軍幹部を討伐した創介を祝った。パーティを開いていた。

すると……

??? 「君が創介？」

創介は声のする方に目を向けると、彼女は居た。

この世界には似つかわしくない学園の制服、創介と同じ蒼い眼、そして紅い髪のポニーテール。

彼女の名は八坂^{やさか}火継^{ヒツギ}。PSO2エピソード4に登場する地球人である。

創介「ヒツギ……なのか？」

ヒツギ「うん！エリスって[!]人に頼まれて異世界に来たんだ。」

創介「ハアアアアアアアアアア^{!?!?!}」

創介は驚きの大声を上げた^{!?!?!}

t o b e c o n t i n u e d ……

第七話 浄化の申し子

創介「なんでお前がここに居るんだよ!!？」

ヒツギ「何よ私が居るのが嫌なの？」

創介「いや、ここに居る事が驚きで…」

カズマ「創介、その人は誰なんだ？」

創介「あ、ああ彼女は八坂火継やさかヒツギ。前に一緒に戦った仲間というか友達……かな？」

ヒツギ「まあそんな感じで良いよ。」

カズマ「佐藤和真だ。」

めぐみん「我が名はめぐみん！アークウイザードにして爆裂魔法を操る者！」

めぐみんの名乗りにヒツギはポカンとする。

ヒツギ「ねえ創介……めぐみんって…」

創介「一応言っておくがめぐみんは紅魔族って言う種族で変な名前を持ってて厨二病を発症しているのが特徴だ。」

めぐみん「おい！私達紅魔族について言いたい事があるなら聞こうじゃないか！」

アクア「私の名はアクア。アクシズ教の御神体にして、水の女神よ！」

ヒツギ「女神？エリスと知り合いなの？」

ダクネス「エリス様だと!？」

するとダクネスが口を挟む。

「ヒツギと言ったか？エリス様に会ったのか!？」

ヒツギ「え？そうだけど……」

ダクネス「な、なんと!？エリス様は実在したのか!？」

ヒツギ「創介、どう言う事？」

創介「ああ、聞いた話によるとどうやらエリス様はこの世界ではかなり崇拜されているらしいぞ。」

ヒツギ「なるほど……ん？じゃあ私と創介って本物の神様に会って

るの?」

創介「まあ、そうなるな。」

ヒツギ「ええ!? 神様って本当に居たんだ!」

創介「あ、そうだ。俺と一緒に戦うなら冒険者登録をしないか?」

ヒツギ「冒険者登録?」

創介「ああ。俺と一緒に戦うには冒険者カードって言う免許みたいなやつが必要なんだ。はい、登録料。」

創介は説明してヒツギに1000エリスを渡した。

ヒツギ「あ、ありがとう」

冒険者ギルド内カウンター前

ヒツギは身長、体重、年齢を記載して魔導具に手を翳す。

ウエイトレス「ヒツギさんステータスは……ええ!」

ヒツギ「どうしたんですか?」

ウエイトレス「ヒツギさんのステータスは幸運値は普通ですがそれ以外のステータスは平均よりかなり高いです!これなら全職業になれますよ!……あら?」

するとウエイトレスは見た事も無い職業名を見つける。

「何でしょうこれ? ブレイバー?」

創介「ブレイバー!」

ブレイバー。それはPSO2に登場するカタナとバレットボウを使用する事が出来る近距離戦、遠距離戦両方の戦い方が出来るクラス。

「なあヒツギ、お前刀を使うからブレイバーが良いんじゃないか?」

ヒツギ「言われてみれば確かに……ブレイバーでお願いします!」

ウエイトレス「わかりました。それでは八坂火継さん。今後のご活躍を期待しております!」

そんなこんなで冒険者となったヒツギは早速クエストのジャイアントトード討伐を受けて平原へ向かった。

ヒツギ「あれがジャイアントトード……デカいわね」

創介「そうだな。」

めぐみん「あの、ヒツギさん、武器はあるんですか？」

ヒツギ「あるわよ。」

ヒツギはそう言うのと蒼い光から白い刀が姿を現し、ヒツギは抜刀するとヒツギの服装は紅い戦闘服へと変わる。

ヒツギ「行こうか。あめのむらくも天叢雲」

ヒツギはジャイアントトードに向かって駆け出す。

ジャイアントトードは舌を伸ばしてヒツギを捕食しようとするがヒツギは難なく避けてジャイアントトードの胴体を斬り裂き、別方向から迫るジャイアントトードの群れに駆け出して行った。

めぐみん「何ですかアレは!?!とてもかっこいいです!!!」

めぐみんはヒツギの天叢雲と服装が変わる事で目を輝かせていた。

創介「流星はヒツギ、なかなかやるねー」

やがてヒツギはジャイアントトードの群れを全滅させた。

ヒツギ「よし、こんな感じかな。」

創介「お疲れ」

その後、アクセルへ戻りヒツギの歓迎パーティをした。

t o b e c o n t i n u e d ……

第八話 神々からの授かり物

ヒツギの歓迎パーティーをしてか5日間の間、創介達はとあるクエストで出会ったウィズと言う魔王軍幹部であり魔道具店の店主から依頼を受け、そこからなんやかんやあつて屋敷を手に入れた。

そして、屋敷を手に入れた日の夜、現在創介は夢の中でエリスと対面していた。

創介「ど、どのような用件で？」

創介は恐る恐る用件を聞くとエリスは答えた。

エリス「実は貴方の居る世界にダーカーが現れた事についてです。」

創介「何か判つたのか？」

エリス「エルミルを、知っていますか？」

エリスの口から出たエルミルと言う言葉に創介は目を見開いた。

創介「え、エルミルって、PSO2エピソード5のラスボスの?！」

エリス「はい、彼は実在してこの世界に身を潜めています。」

エリスの話によるとどうやら守護輝士主人公に斃された後、この世界に來たと同時にダーカーを生み出す能力を手に入れて全ての世界を消し去ろうとしていたのだ。そしてエリスから衝撃の事実が明かされた。

エリス「エルミルの狙いは、貴方なんです。」

創介「え……?！」

「ど、どう言う事だよー!」

創介の説明の要求にエリスは語り出す。

エリス「エルミルは新たなるダークファアルスを生み出そうとしてい
るんです。」

創介「新たなる……ダークファアルス？」

エリス「その名は【猛獣】ビースト。ダークファアルス【猛獣】ビースト」

創介「ダークファアルス……【猛獣】ビースト……!」

エリス「後は依代を用意するだけで【猛獣】ビーストは生まれてしまうんです。」

創介「その依代が、俺なのか?」

創介の言葉にエリスは頷く。

エリス「神々はエルミルの存在をととても危険視しています。そこで、貴方にはこれを授けます。」

エリスはそう言って何かを唱えると天からPSO2最強武器シリーズのクラススシリーズが舞い降りて来た。

創介「これは!？」

エリス「この武具達を、貴方に託します。」

創介「これ、あれか?ファイナルファンタジー15のノクティスのファントムソードみたいな戦い方が出来ちゃうのか?シフトブレイクとか出来ちゃうのか?」

エリス「はい。後、シフトブレイクを使う時にHPを消費すると言ったデメリットは消してありますよ。」

創介「……………可能なら俺のパーティーの分もお願い出来るかな?」

「カズマにはクラスティアを、めぐみんとアクアにはクラスステッキを、ダクネスにはクラスエッジを授けてくれねえか?」

エリス「解りました。」

創介の頼みをエリスは了承する。

エリス「それでは、この世界を、私達の世界を頼みます。」

創介「ああ。任せろ。」

すると創介の意識が遠くなり、意識が戻り、目を覚ますとベッドの上で寝ていて気づけば朝になっていた。

創介「……………必ずエルミルを倒さねえと…………」

創介はそう決意した。創介は朝の支度を終えて広間へ入るとカズマが声をかけて来た。

カズマ「ああ創介か!?!なんか朝起きたら隣になんかお前が使ってた武器と似たような武器が転がってたんだ!」

創介「ああ、実はな…………」

創介は説明をした。

ダクネス「エリス様が私達にこれを!？」

アクア「エリスの奴、良い贈り物じゃないの!これなら誰にも負ける気がしないわ!」

めぐみん「はああああ／＼／＼／＼この白銀の輝き、そして身体中に
伝わる膨大な魔力……最高です……／＼／＼」

カズマ「創介本当にありがとう！俺頑張るよ！」

創介「そりゃあ良かった。そんじゃあ早速……」

創介が言いかけたその時……

『デストロイヤー警報！デストロイヤー警報！機動要塞デストロイ
ヤーがこの街に接近中！住人の皆様は避難を！冒険者の皆様は大至
急冒険者ギルドへ！』

創介「……ハア？」

創介初の死闘が始まろうとしていた。

t o b e c o n t i n u e d ……

第九話 作戦会議

アクセルの街に響いた一つの警報は街中を騒ぎに包んだ。

アクア「逃げるのよ！なるべく遠くへ逃げるのよ！」

創介「お、おいちよつと待って！何だよ機動要塞デストロイヤーって？」

創介はそう尋ねると

めぐみん「創介さん、今この街に機動要塞デストロイヤーが迫っているんです！」

ヒツギ「デストロイヤー？」

めぐみん「はい、それが通った後はアクシズ教徒以外何も残らないと言うとんでもない大物賞金首がこの街に来ているんです！」

めぐみんがそう説明した。

カズマ「つまり、結構ヤバイ奴なのか？」

めぐみん「はい」

アクア「ねえちよつと？何でうちに可愛い信者達がそんな風に言われているの？みんな可愛い子達なのよ？」

ヒツギ「じゃああなたの爆裂魔法ってやつでどうにかなれないの？」

ヒツギはめぐみんにそう尋ねると

めぐみん「……無理です……デストロイヤーには強力な結界が張られているのでいくら私の爆裂魔法では一、二発防いでしまうかもしれませんが……」

めぐみんは申し訳なさそうに顔を俯きながらそう言うが

創介「大丈夫だ。」

めぐみん「え？」

創介「めぐみん、その武器は魔力の消費を抑えて、更には魔力を時間経過で回復することが出来るし更には攻撃の威力が上がる効果があるんだ。」

めぐみん「それって爆裂魔法を何度も撃てるしこの武器のおかげで

爆裂魔法の威力が上がるし魔力消費も抑えられるという事なんですか!?!」

創介「そうなるな。」

カズマ「じゃ、じゃあ俺のもアクアのもダクネスのもそれと同じ力があるのか?!」

創介「ああ!」

アクア「良いじゃないの!もしかすればデストロイヤーに勝てるかもよ!」

ダクネス「ああ。エリス様からに授かり物、有り難く使わせてもらう!」

創介「そんなじゃあ冒険者ギルドへ行くとするか!」

創介達はデストロイヤー討伐クエストを受ける為冒険者ギルドへと向かった。

冒険者ギルド

創介達が冒険者ギルドに入ると、冒険者達は歓喜の声を上げていた。

冒険者A「蒼炎の勇者だ!」

冒険者B「それに碧の巫女も居るじゃないか!」

創介「なんだ?」

創介達は冒険者達が見る方を見てみるとなんと、アニメポケモンに登場するアラン、マノンと瓜二つな少年と少女が居た。

アクア「ああ、あの人達は数ヶ月前に現れた冒険者達で転生者でもないのに勇者候補に入って居る凄腕の冒険者よ。」

カズマ「マジかよ!?!」

するとギルドの職員が声を張り上げる。

ギルド職員「お集まりの皆さん!本日は緊急の呼び出しに応えてくださり大変ありがとうございます。今このアクセルに迫る機動要塞デストロイヤーの討伐を開始します!」

すると冒険者達はテーブルを並べ替えて即席の会議室のような空間を作り出す。

ギルド職員「それでは、只今より作戦会議を始めます。各自席に着いてください！」

創介達は職員の指示に従い、席に座る。アランとマノンが一瞬だけ創介をチラリと見る。

アラン（あいつから妙な力を感じるな）

マノン（なんだろう……あの人から変な力を感じる……）

その後、冒険者達は様々な作戦を練ったがそれらに似た作戦は過去に実行に移されたが悉く失敗に終わったらしい。

アクア「ちよつと待ちなさい！」

するとアクアが手を上げる。

アクア「私なら結界を破れるかも知れないわ！確証は無いけど」

アクアの言葉に冒険者達は期待の声を上げる。

創介「ならダメージを入れて破りやすくすれば良いんだな？」

創介はそう言いながらめぐみんを見る。

めぐみん「私の爆裂魔法でも流石に一撃では仕留め無いかと思います……」

めぐみんは申し訳なさそうにそう言う入り口ドアが開けられ、そこから現れたのは……

ウイズ「すいません！遅くなりました！一応私も冒険者の資格を持っているので私の手伝いに来ました！」

ウイズ。ダクネスが創介達のパーティーに入ってから翌日に受けたゾンビメーカー討伐クエストでアクセルの墓地で出会った魔王軍幹部。魔王軍幹部でありながらも実は性格は優しく、アクセルの街で魔道具店の店主を営んでいる女性。彼女の登場により冒険者達は熱烈な歓声を上げた。創介が近くにいた冒険者に尋ねると、どうやら彼女は元々凄腕のアークウイザードで名を馳せていたらしい。

創介「これならデストロイヤーを倒せるかも知れないな！」

ヒツギ「うん！必ずデストロイヤーを倒さない！」

そして作戦はというと、まず、アクアが結界を解除して、そこでめぐみんとウイズが爆裂魔法で脚を四本ずつ破壊して動けなくなった所で創介、ヒツギ、カズマ、アラン、マノンが動力源を破壊すると言

う作戦になった。

アクセルの街前

『冒険者の皆さん、そろそろデストロイヤーが見えてくる筈です！
戦闘準備を！』

魔法で拡大されたギルド職員の声が聞こえ、冒険者達は武器を構える。すると遠い丘の向こうから見えて来たのは巨大な蜘蛛のような物体が猛スピードで迫って来た。

ヒツギ「あれが機動要塞デストロイヤー……」

創介「みんな！準備は良いな?!」

創介は新米でありながらも冒険者達を鼓舞する。

今ここに、機動要塞デストロイヤーとの激闘が始まろうとしている。
た。

t o b e c o n t i n u e d ……

第十話 もう一つの授かり物

アクア「セイクリッド・ブレイクスペル！」

アクアは小さな光弾を放ち、光弾はデストロイヤーの結界に着弾すると結界は粉々に砕け散った。

創介「めぐみん、頼んだぜ！」

めぐみん「はい！神より授かったこの杖の力を試す時です！」

めぐみんは自信満々でウイズと合わせて爆裂魔法の詠唱に入る。

めぐみん「白より白く、光より眩き純白に、我が真紅の混淆を望みたまう。覚醒の時来たれり、原初より生まれ出し理、無変の光となりて現出せよ！」

ウイズ「黒より黒く、闇より暗き漆黒に我が深紅の混淆を望みたまう。覚醒の時来たれり、無謬の境界に落ちし理、無行の歪みとなりて現出せよ！」

「『エクスプロージョン!!』」

めぐみんは少し紅い白い光を、ウイズは暗く紅い光を放ちデストロイヤーの脚を全て粉碎して移動手段を失ったデストロイヤーは凄まじい地響きと轟音を発しながら動きを止めた。

ヒツギ「凄……………」

するとアナウンスが聞こえて来た。

アナウンス『活動停止を確認。排熱及び機動エネルギーの消費ができません。警告、速やかな避難を、繰り返します。速やかな避難を推奨します。』

カズマ「おい、これって……………」

ヒツギ「結構まずいんじゃないの!?!」

創介「なら動力源を潰しに……」

すると創介の声にエリスの声が響いて来た。

エリス（創介さん！）

創介（エリス様!?!）

エリス（実は貴方の贈り物はもう一つあるんです!）

すると創介は新たな力を発現した。更に創介の記憶にその新たな力の情報が刻み込まれた。

Fate / EXTELLA LINKより

〔月海の血闘〕

アクア「ちよつと！急に黙ってどうs…」

創介「問題無い、こいつで決める。」

創介の表情は自信満々な笑みを浮かべていた。

創介「行くぞ！」

創介はクラスサーベルをクラススティアに持ち替えると上空へ飛び始める。

カズマ「飛んだ!?!」

創介「これぞ、世界を創りし創世の光！」

創介の背後にクラスエツジ、クラスアンカー、クラスバイク、クラスハンガー、クラスダブリス、クラスノツカー、クラスサーベル、クラスグライド、クラスアサルト、クラススカノン、クラスバレル、クラスアーチェ、クラスタリス、クラスヴァーヂ、クラスウオーカー、クラスリードの計16種類のクラスの武具が出現しデストロイヤーへ狙いを定める。

創介「光纏いし創世の光！」

創介は16種の武具と共に色鮮やかなレーザーを放ち、デストロイヤーは爆散した。

創介「ふう…こんなもんかな。」

こうして、機動要塞デストロイヤーは一人のアークスによって破壊され、アクセルは救われたのだが……

??? 「夢幻創介！お前には国家転覆罪の容疑が掛けられている！私達と共に来てもらおうか！」

創介 「……ハア？」

創介に理不尽が舞い降りて来てしまったのだった。

t o b e c o n t i n u e d ……

第十一話 取り調べ

取り調べ室

創介が冤罪に掛かってしまい牢屋に入れられ、そして今、取り調べを受ける事となった。そして王国検察官のセナがベルのような物を取り出した。

セナ「これは嘘を看破する魔道具だ。この部屋で嘘は通用しないと思え。」

創介「……俺の職業は料理人だ。」

チーンと創介の嘘に反応するようにベルが鳴った。

セナ「……満足か？」

創介「はい……」

セナ「夢幻創介。年齢は十六歳で職業は冒険者。クラスは守護輝士ガーディアンか……。冒険者になる前は何をしていた？」

創介「……出身地は日本で学生をしてて、学校が終わったり、休みの日にはゲーム三昧です。」

セナ「……」

セナはチラリと反応しない魔道具を見て創介の発言が嘘ではない事を察する。

セナ「……では、冒険者になった動機を聞こうか。」

創介「……実は俺……一度死んでいるんです。」

セナ「なるほど一度死んで……え？」

創介「でも死後の世界でエリス様と出会ってこの世界の事を知って、魔王に苦しめられている人々を見て見ぬふりなんか出来るわけないしこつちだつてこの世界の為に奮闘しているんですよ？それなのに……それなのに……」

「なんでこんな仕打ちを受けなきゃなんないんだよ！こちとらさあ！魔王軍幹部を倒してデストロイヤーを倒してアクセルの街を救ったんだよ！それなのになんで人類の敵扱いされなきゃいけないんだよ！ふざけんなよ！こつちは人類の為に貢献したのにさあ！ぶち殺

してやりてえよ！ふぎけんなクソが!!」

創介は机をバンバンと思い切り叩きながら大声で叫んだ。

セナ「す、すみません！これも私の仕事なので……………」

セナは申し訳なきように謝る。

創介「ハア…ハア…：見ろよ鳴ってないだろ？これでも俺は嘘をついているって言うのか!?ええ?!」

セナ「な、鳴らないなら嘘ではない事を信じます。…………貴方が一度死んだのは信じられませんが…………」

「…………一応聞きますが魔王軍とは本当に無縁ですか？」

創介「…………正直に話します。ウイズと言う冒険者を知っていますか？」

セナ「一応知ってはいます。」

創介「実は彼女…魔王軍幹部なんです…。」

セナ「!?!」

セナは衝撃の事実を目を見開く。

創介「でもね、彼女はね、魔王から結界の維持を任されているのですが彼女は言ったんですよ？人間を襲う気は微塵も無いって。」

セナ「…魔道具が鳴らない…………本当なのですか？」

創介「本当です。これを聞いてウイズを殺してみろ…………お前らを憎しみて殺してやるからな？」

セナ「は…………はい…」

セナは創介の忠告を胸に刻んだ。

セナ「…………では、貴方は魔王軍幹部の関係者でありながらも魔王討伐を奮闘している…………と言う事でよろしいですか？」

創介「はい、それで構いません。」

セナ「判りました。……………本当に、魔王の味方ではありませんか？」

創介「そんなのは微塵もありません。可能なら被害者に説得をお願いします。」

セナ「…………判りました。貴方に対して少し罪悪感を感じているのでお詫びとしてそうします。」

創介「ありがとうございます……」
そして翌日。裁判が開かれた。

t o b e c o n t i n u e d

第十二話 乱入

裁判長「これより、国家転覆罪容疑が掛かった夢幻創介の裁判を始めます。」

裁判長の第一声で裁判は開始した。

そして創介を見下ろすのはこの国の領主のアレクセイ・バーネス・アルダープ。この事件の被害者。

アルダープは創介を邪魔者を見るような目で睨んだ後ヒツギ、めぐみん、アクアを良い物を見つけたような目を見せた後ダクネスを見ると一瞬だけ目を見開いた。

ヒツギ「何故か……あいつから嫌な気配を感じる……」

アクア「奇遇ね、私もよ。」

そしてセナが起訴状を読み始める。

セナ「被告人夢幻創介は機動要塞デストロイヤー襲来時に見た事もない力を使いデストロイヤーを破壊。ですがそのデストロイヤーの飛び散った破片が被害者の屋敷へ落ちて来て屋敷は全壊し、アルダープは現在この街の宿屋を借りる事を余儀なくされております。」

アクア「意義あ…ムグ!？」

アクアが余計な事を言おうと察したのかヒツギは瞬時にアクアを取り押さえた。

ヒツギ「すみません！続けてください！」

セナ「は、はい。それでは国家転覆罪の適応を求m…」

???「そうはいかないなあ。」

突如聞こえた声に一同は目を向けるとそこに居たのはPSO2の世界にある異世界オメガで暗躍した存在にして全てを無に帰さんとしたダークファルス〔仮面〕^{ベルソナ}の名を受け継ぐ者と自称する存在、エルミルだった。

創介「エルミル!？」

カズマ「知っているのか!？」

創介「ああ。あいつは危険だ！」

セナ「何者ですか貴方は!？」

エルミル「僕の名はエルミル。簡単に言えば魔王の側近にしてこの世界を滅ぼす存在、ダークファルス【仮面】の名を受け継ぐ者。と言っても今は不完全だけどね。」

するとエルミルの服装は黒い戦闘衣へ変わるがその服装は一部にノイズのようなオーラが溢れ出していた。

エルミル「創介がここで死んでしまったら僕の計画は水の泡になるからね。」

エルミルはそう言ってパチンと指を鳴らすと多くのダーカー達が溢れ出て、裁判場はパニックに包まれた。

創介「めぐみん!カズマ!クズ紙!ダクネス!市民の避難を頼む!」

カズマ「わ、判った!」

めぐみん「判りました!」

アクア「判ったわ!」

ダクネス「あ、ああ!」

創介「ヒツギ!エルミルを斃すぞ!」

ヒツギ「判った!」

創介はクラスサーベルを、ヒツギは天叢雲を召喚しエルミルへ斬り付けるがエルミルは禍々しい剣を召喚し二人の攻撃を防いだ。

エルミル「久しぶりだね、センパイ。」

創介「悪いがお前には先輩と呼ばれる筋合いは無い!」

創介はそう言ってヒツギと合わせてエルミルをアダループの所へ弾き飛ばす。

アダループ「ヒイイイイイイ!!」

エルミル「ああ、確か君はマスクウエルを使って創介を始末しようとしてたね?」

エルミルはそう言ってアダループを囲むようにダーカーを召喚する。

エルミル「君が居ると僕の計画が狂うんでね。さよならだよ。」

アダループ「や、やめろ！私はまだ、アアアアアアアア!!!」

アダループは悲痛な悲鳴を上げながらダーカーに喰い殺された。

創介「てめえ!!!」

エルミル「さーて、続きを始め……!」

するとエルミルは何かに気付いたのか空を見上げる。

エルミル「……なるほど……気が変わったよ。今回はこれで勘弁してあげるよ。」

創介「待て!」

エルミルはそう言って赤黒い光に包まれると姿を消した。

創介「……クソ!」

創介は悔しそうに歯を食いしばった。

ヒツギ「……裁判長さん。それでも創介が悪者だと言えますか?」

裁判長「……正直言って領主は死んだのはとりあえずエルミルと
か言う奴のせいにして創介は無罪にします。」

創介「……裁判長さん、すまねえ!!!」

創介は申し訳なさそうに裁判長へ土下座をした。

裁判長「大丈夫大丈夫！君の事を知ってから悪い奴なわけないって
信じてたから気にしなくて良いよ!」

こうして、創介の冤罪は晴れて、裁判は幕を閉じた。

???
s
i
d
e

(このまま、何処へ行くのだろうか)

(何も見えない、何も聞こえない。)

(このまま、消えてしまうのだろうか)

少し近い未来の後に少年は出逢う。夢を追う少年と、その少年に想いを寄せる少女と出逢う事を。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:
:
:

第十三話 失望

エルミルが創介の裁判に乱入したその夜、領主のアルダープの葬式があったのだがアルダープは絵に描いたような悪徳貴族だったらしく葬式には誰にも参加をしなかった。それどころかアルダープに弄ばれた人達から歓喜の声が上がったようで相当嫌われていたらしい。そして翌日、エルミルは魔王の側近である事が明らかになり、賞金首が掛けられ、多くのベテラン冒険者がエルミルを探していた。

創介達の屋敷

黒猫「なーお」

めぐみんが抱えているのは額に十字架があり、背中に小さな羽が生えた黄色い目の黒猫だった。

創介「……飼っていいぞ。」

めぐみん「え?」

創介は飼って良いかとめぐみんが言う前に飼う事を了承した。

ヒツギ「へー可愛いじゃない。名前はなんて言うの?」

めぐみん「ちよむすけです。」

「」「」「……」「」

一同はめぐみんのネーミングセンスに一瞬固まるが創介がちよむすけに魚を差し出すとちよむすけは小さな炎を吐き、魚を軽く炙った。

創介&ヒツギ&カズマ「え?」

創介、ヒツギ、カズマはちよむすけの特技を目撃して目を見開いた。

創介「……猫って火を吐くっけ……」

ヒツギ「た、多分、この子が特別なんじゃないかな?」

カズマ「ま、まあ可愛いから良いんじゃないか?」

セナ「夢幻創介!夢幻創介は居るか!」

玄関のドアを思い切り開けたのは検察官のセナだった。

創介「セナさん？一体どうしたんですか？」

セナ「実は街周辺に冬眠中だったカエルが這い出して来ていたのだ。ギルド職員の報告によると何か怯えるように地上へと這い出して来たのだ。どうやら最近連日で爆裂魔法を連発している人が居たと聞いたのだが……」

セナの言葉に創介はめぐみんに目を向ける。

創介が冤罪で捕まり、牢屋にいた頃アクアがめぐみんと協力して創介を脱獄させようとしたのだが創介はアクアが来る直前はいつも爆裂魔法の音が響いていた。創介は察した。この異変の原因はめぐみんだと。

創介「……………めぐみん。」

めぐみん「……………はい……………」

創介「今謝らなければエリスにお前のクラスステッキ没収してもらうように言うぞ？」

めぐみん「ごめんなさい!!!」

創介の脅しが効いたのかめぐみんは素直に謝った。

創介はヒツギ、めぐみんを連れてジャイアントトードの討伐に向かった。

アクセルの街の外

創介はヒツギと共に冬眠から目を覚ましたジャイアントトードを掃討していた。

創介「めぐみん！」

めぐみん「え…?」

めぐみんがジャイアントトードに背後を取られ食われそうになった時

???「ライト・オブ・セイバー！」

するとめぐみんを食おうとしていたジャイアントトードは真つ二つに斬り裂かれた。

三人は声のする方に目を向けるとそこに居たのは黒いローブに身を包んだ紅い目の少女だった。

創介「誰だが知らないけどありがとな。」

創介は欠かさず少女にお礼を言った。

???「ら、ライバルがカエルなんかにはやられたら私の立場が無くなっちゃうから助けた訳じゃないから……」

少し顔を朱くしながら少女はそう言った。

???「久しぶりねめぐみん！今の私は今見た通り上級魔法を覚えたわ！さあ！決着をつけるわよ！」

少女はそう言いながらめぐみんへ指を突きつける。

そしてめぐみんはと言うと…

めぐみん「どちら様でしょう？」

???「ええ!？」

「ほら、覚えてる!?学校で同期だったゆんゆんだよ！」

少女はゆんゆんと名乗った。

ヒツギ「知り合いなの？」

めぐみん「いえ、大体名乗りをしないなんておかしいではありませんか。」

ゆんゆん「判った！本当は恥ずかしいけど……」

「我が名はゆんゆん！アークウィザードにして、上級魔法を操る者。」

やがては紅魔族の長となる者！」

ゆんゆんはかっこよく名乗りを上げた。

めぐみん「とまあ、彼女はゆんゆん。紅魔族族長の娘で私の自称ライバルです。」

ゆんゆん「ちよつと！名前覚えているじゃない……あれ？あの、私の名前を聞いても笑わないんですか？」

創介「ゆんゆんって名前、俺は良い名前だと思うよ。」

ヒツギ「私もそう思うよ。なんか可愛いし。」

ゆんゆん「え!?!／／」

創介とヒツギの言葉にゆんゆんは顔を朱くする。

めぐみん「あ、そうそうゆんゆんは名乗りをするのを恥ずかしがっていて私達紅魔族の変わり者でいつも学園では一人でご飯を食べていました。」

ヒツギ「え？」

めぐみん「本当に変わり者ですね。紅魔族の恥晒しです。」

めぐみんがそう言いきったその時

めぐみん「え……………?」

めぐみんは突然殴られた。そして自分を殴ったのはなんと創介だった。

めぐみん「い、一体何を…」

創介は何も言わずにめぐみんの言葉を遮ってまた殴った。

ヒツギ「創介!」

創介は何も言わずにクラスサーベルを召喚し、その剣先をめぐみんの喉元へ突き付ける。

創介「これからはゆんゆんをちゃんとした友達として受け入れろ。

さもなくば……………」

「俺は、お前を殺す。」

めぐみん「え……………?」

創介の言葉にめぐみんは固まる。

創介「……………機嫌が悪い。先に帰らせてもらう。」

ヒツギ「創介!」

創介はヒツギ達を置いてアクセルの街へと帰って行った。

ヒツギ「めぐみん、大丈夫?」

ヒツギはめぐみんに寄り、大丈夫かどうか問う。

だが、めぐみんは震えていた。創介に対して凄まじい恐怖を、彼女は判らなかつた。何故自分が創介に殴られたのか、そしてめぐみんは創介から告げられた言葉を思い出し涙を流し始めた。

ゆんゆん「め、めぐみん?」

めぐみん「……………さい。」

ヒツギ「?」

めぐみん「ごめんなさい……………」

ゆんゆん「え?」

めぐみん「ごめんなさい！今まで仲間外れにしててごめんなさい
!!!」

めぐみんは大粒の涙を流しながら必死にゆんゆんに謝った。

そしてその日の夜。

創介達は晩ご飯を食べていた

創介の屋敷

カズマ「……お前、本当にめぐみんを殴ったのか？」

創介「……それがどうした？悪いのはゆんゆんを仲間外れにしためぐみん達だろ？」

ダクネス「創介！いくら何でもそれはやりすぎ……」

創介^{ミッチ}「黙ってるよクズ。」

創介は殺意に満ちた眼でダクネスを睨み、ダクネスは大人しく黙った。

めぐみん「……創介さん、私はゆんゆんと約束しました。本当の友達でいたいって。それと、他のみんなにもこれからゆんゆんを優しくしてほしいって手紙を出しました。……許してくれますか？」

創介「……ちゃんとゆんゆんを友達として受け入れるか？」

めぐみん「はい……」

創介「……これからゆんゆんみたいな奴が居たらゆんゆんと同じようにしてやれよ？」

創介はそう言って自分が最後に食べようとしていたステーキをめぐみんに渡す。

めぐみん「え？」

創介「毒は入れてない。安心しろ。俺は先に寝る。」

「それと……」

めぐみん「？」

創介「すまなかった。」

創介はそう言って自分の部屋へ行った。

そして翌日。

創介「アルカンレティア？」

めぐみん「はい、水と温泉の都なんです。」

アクア「アルカンレティアに行くの!？」

めぐみん「はい。ここ最近創介さんばかり任せられているので……」

創介「俺は全然気にしてないけど、温泉があるし、行ってみるか。」
こうして、創介達は休息を取る為にアルカンレティアへ向かう事になった。

t o b e c o n t i n u e d ……

第十四話 アルカンレティア

めぐみんの誘いを受け、創介達は二日をかけてアルカンレティアへ辿り着いた。

ヒツギ「ここがアルカンレティア……」

創介「温泉があるから楽しみだな。」

めぐみん「はい。」

創介達は早速温泉に入る為旅館に行こうとするが……

アクシズ教徒A「ようこそいらっしゃいました！入信ですか？観光d……」

アクシズ教徒達が現れるが創介はクラーズの武具達を召喚し喉元に突き付ける。

カズマ「おい創介!？」

アクア「ちよつと！私の可愛い信者になにすんのよ！」

創介「お前らに質問だ。もし、お前達が崇める神様が人の嘲笑ったとする。お前らはどうする？」

アクシズ教徒達「え？」

創介の言葉にアクシズ教徒達は動揺する。

創介「その人が死ぬ寸前に助けようとしたのに神は嘲笑った。ここまで言えば判るだろう？」

「お前達の神は、邪神だ。」

「アクア様の為？逃げたいなら逃げれば良い？上手く行かないのは世間が悪い？巫山戯るなよクズ共。お前らが何をしでかしたのか

第十五話 激闘！ハンス戦！

創介はこの街の異変を解決する為仲間と共に源泉へと向かった。

源泉付近

創介「おいお前！」

???「！」

創介「お前、ここで何をしている？」

???「何ですかあなた達は。ここは立ち入り禁止だ！」

男は創介の顔をじっと見ると本性を表したのか不敵に笑い始めた。

???「まさかこんな所でお前に会うとはな。」

創介「お前、何が目的だ。」

???「簡単な事だ。この街の温泉を汚染するだけだ。」

ハンス「俺の名はハンス、魔王軍幹部の一人、デットリイポイズウ
ンスライムのハンスだ。」

ヒツギ「デットリイポイズンスライム？」

めぐみん「気を付けてください！奴の毒は強力で触れれば即死だと思ってください！」

めぐみんは仲間らに注意を促す。

カズマ「即死!？」

創介「だったらこうすれば良いだろう!？」

創介はそう言っただけでクラスバレルを召喚し、それぞれ片手撃ちを放つ
P A ブランニュースターを放つ。

ハンス「何!？」

本来スライムには物理攻撃は効かないはずが何故か通用していた。

創介「悪いがこいつは結構特殊で強力だね。ケリを付けさせてもら
うぜ！」

創介はクラスバレルからクラスエッジへと持ち替え、敵に高速
で近づき突き刺すP A のフラッシュオブトリックで素早くハンスに
近づいて突き刺し、素早くクラスエッジを上空へ投げ、ハンスを打
ち上げ、ライジングスラッシュで連続で斬り続けた。

創介「終わりだ。ヒーロータイムファイニッシュ!!!」

創介はクラスエッジに巨大な光の刃を纏わせ、ハンスを一刀両断に斬り裂いた!

ハンス「ば、馬鹿な……」

創介「あばよ。」

創介は今度はクラスカノンへ持ち替えてレーザーを放つPAのスファイレイザーを放ち、そのレーザーでハンスを跡形も無く消し飛ばした。

カズマ「…今思うと、お前本当に強いな……」

創介「そりゃどーも。そんじゃあ、帰るか。」

その後、創介はこの事をギルドに報告して多額の賞金を貰い、更にクラス教から大きく感謝された。

そして、ハンスとの戦いから数日後……

創介達の屋敷

創介「何かあったのか? ゆんゆん。」

ゆんゆん「お願い……助けて……このままじゃ、紅魔の里が滅んじゃう!!!」

創介「え? どう言う事だ?」

ゆんゆん「実は里に見た事も無いモンスター達が現れ始めて……」

創介「よしみんな! めぐみんとゆんゆんの故郷を救うぞ!」

ヒツギ「え!? ちょっと即決過ぎない!」

創介「こっちはめぐみんのお詫びは前のあの時じゃ気が済まねえんだ! 明日準備するぞ!」

そして翌日、創介達はめぐみんとゆんゆんの故郷、紅魔の里へと向かった。

t o b e c o n t i n u e d ……

第十六話 激闘！シルビア戦

創介達が紅魔の里へ行く途中、めぐみんがある事を尋ねた。

めぐみん「創介さん。あの時、なんで私を殴ったんですか？」

創介「ああ、実はさ、俺、幼い頃独りぼっちで虐められててな……。でも、その時に助けてくれた人がいたんだ。その人と仲良くなってたんだけど、そいつ、事故で死んでしまったんだ……」

創介は顔を俯きながらそう言った。

創介「その時から幼い頃の俺みたいに虐められている人がいるかもしれないって思ってた自分を鍛え始めたんだ。」

めぐみん「そうだったんですか……」

すると遠方から大きな爆発音が鳴り響いた。

創介「今のは!？」

めぐみん「あの方角……紅魔の里です！」

創介「急ぐぞ！」

創介は嫌な予感を感じたのか急いで紅魔の里へと向かった。

紅魔の里

創介達は紅魔の里へと辿り着いたのだが里は火の海だった。

めぐみん「そんな……」

エルミル「来ると思っていたよ、創介^{センパイ}。」

創介「エルミル！」

創介達は武器を構える。

創介「お前、今度は何しに来たんだ！」

エルミル「ああ、ちよつとシルビアとか言う奴の手助けをしようと思ってるね。今は見てのとおりさ。」

エルミルの視線の先には下半身が蛇のような姿になった魔王軍幹部のシルビアだったのだが、エルミルにより自我を失い、暴走していた。

エルミル「それじゃあ精々足掻いてくれよ？ 創介。」

エルミルはそう言つて赤黒い光に包まれ、消えていった。

カズマ「おい創介、どうすんだよ!？」

創介「決まってる。この力を使う。」

創介はそう言うと、赤黒いオーラを纏い始める。

創介「ダークブラスト・エルダーフォーム」

創介はそう唱えると創介は赤黒い光に包まれると巨大な人形の異形へと姿を変えた。

【巨軀】「我が名は【巨軀】！ 闘争の化身なり!!」

めぐみん「創介……なんですか……?？」

めぐみんの言葉に【巨軀】は頷き、シルビアに戦いを挑みに行った。

【巨軀】「クハハハハハ!!」

【巨軀】はインフィニティラッシュを放ち、無慈悲にシルビアを殴り続ける。

ダクネス「ああ……あの攻撃を食らつてみたい……」

カズマ「……行くなよ?」

【巨軀】「我が力、刮目してみよ!!」

【巨軀】はアルティメットインパクトを放ち、シルビアを跡形も無く消し飛ばした。

こうして、紅魔の里壊滅の危機は免れた。

その後、創介は紅魔族から闘争の化身と言う異名をつけられて英雄として称えられた。

創介達の屋敷

創介「いやーなんとか紅魔の里を救うことが出来て良かったぜー。」
アクア「それにしても創介のあの【巨軀】とか言うやつ凄い強さじゃない。」

めぐみん「はい！まさに闘争の化身に相応しい戦い方です!」

創介「そりゃあありがと、そんじゃあ早速飯を食う……」

創介は大広間の扉を開けるとその先の光景に創介達は思考を停止

した。

何故なら蒼いスカーフを纏った黒髪の少年と紅いスカーフを纏った金髪の少女が素っ裸で倒れて気絶していたのだった。

黒髪の少年「あ、ああ……」

すると廊下への扉からドタドタと音が聞こえると、思いきり扉が開かれ、その扉を開いたのは黒髪の少年と共に居た金髪の少女だった。

金髪の少女を見た黒髪の少年は彼女の名前を言った。

セレナと……

セレナ「サト……シ……」

セレナと言う少女は黒髪の少年の名前らしき名を言うと黒髪の少年に思いきり抱きついた。

その光景を見ていた創介は全てを察した。

彼らはアニメポケモンに登場するサトシとセレナだと言う事を……

{絶世スターゲイト}

物語は、動きだす。

第十七話 漂流者

創介達の屋敷

創介「…まずは自己紹介だな。俺は夢幻創介。創介で良いよ。」

ヒツギ「私は八坂火継。ヒツギで良いよ。」

カズマ「佐藤和真だ。」

アクア「アクアよ。」

ダクネス「ダクネスだ。」

めぐみん「我が名はめぐみん！紅魔族随一のアークウィザードにして、爆裂魔法を操る者！」

創介達は自己紹介をする。

サトシ「俺はマサラタウンのサトシ。」

セレナ「セレナです。」

創介（おいおい……かの有名なポケモンマスターを目指すあのサトシと俺のアニメポケモンヒロイン最推しのセレナちゃんは何故この世界に居るんだ？）

ダクネス「マサラタウン……聞いた事が無いな……」

セレナ「ねえサトシ、やっぱりここって……」

サトシ「うん、別世界だと思う。」

カズマ「ん？それって他にも別の世界に行った事があるのか？」

カズマの言葉にサトシとセレナは頷く。

創介「教えてくれ。今まで、一体何が？」

サトシ「……全部話すよ……」

サトシとセレナが今までの出来事を話して数分後……

ヒツギ「そんな事があつたの……？」

アクア「まずあなたたちがウロボロスに会った事が驚きなんですけど……」

創介「…あ、そうだ、サトシ、なんで俺の事を紅介って呼んだんだ？」

サトシ「…顔が似ているどころか瓜二つだった。」

創介「その紅介って奴にか？」

創介の言葉にサトシは頷く。

創介「そうか…（俗に言うパラレルワールドってやつか？）」

「あ、そうだ、お前達にはこれを渡すよ。」

創介はそう言っつてパチンと指を鳴らすとクラーズダブリスとクラースエツジが現れた。

二つの武具は光の粒子となり、サトシとセレナに吸い込まれていった。

創介「よし。後はこうしてと…」

創介は両手をサトシとセレナに向けて翳すと光の粒子がサトシとセレナに吸い込まれていった。

カズマ「何をしたんだ？」

創介「ああ、ちよつと俺の武器を与えて俺のフォトンって言う力のエネルギーを分けたんだ。」

「さて、サトシ、セレナ、行くあてがないならここに住んでも良いぜ。」

サトシ「え？」

セレナ「良いの？」

創介「ああ、ほつとけないからな。」

「カズマ、昼飯の準備だ。行くぞ」

カズマ「あ、ああ。」

創介とカズマは昼ご飯を作りに行った。

そして昼ご飯…

創介「サトシ、セレナ。」

サトシ&セレナ「？」

創介「暫くこの世界に居るならこの世界の事とか学ばなくちゃいけない。俺が色々教えてやるよ。」

昼ご飯の後、創介はサトシとセレナにこの世界の事やこの世界の常識などを教えた。

そして、魔王やエルミルの事を知ったサトシとセレナはこの世界を守るために冒険者になる事を決意した。

冒険者ギルド

ウエイトレス「サトシさんのステータスは……ええ!？」

「なんですか!?! 全てのステータスがとてつもなく高い! 特に力や体力、幸運のステータスがずば抜けて高いですよ! これなら全ての職業になれますよ!」

カズマ「ハア!?! 俺の幸運より十倍くらいあるぞ!？」

創介(そういえばサトシはホウオウを見た。ホウオウはその姿を見れば永遠の幸せが約束されるって聞いたが、その影響で幸運値が?)

ウエイトレス「あら? これは…ガードイアン守護輝士ですね……」

「サトシ「守護輝士?」

創介「サトシ、守護輝士にしたらどうだ?」

サトシ「わかった。守護輝士でお願いします」

ウエイトレス「判りました。セレナさん、どうぞ。」

セレナ「はい。」

セレナは魔道具に手を翳す。

ウエイトレス「セレナさんのステータスは……ええ!?! セレナさんのステータスもずば抜けて高いですよ!？」

アクア「ちよつと! 二人は普通の人間なのになんでそんなにステータスが高いのよ!」

ウエイトレス「おや? どうやらセレナさんも守護輝士になれるそうですね。」

セレナ「じゃあ守護輝士にしようかな……」

ウエイトレス「判りました。それではサトシさん、セレナさん、貴方達の今後の活躍を期待しております!」

冒険者達「ウオオオオオオオオオ!」

するとその時

『緊急警報発令! 緊急警報発令! アクセルの街にダーカーと思わしき未確認モンスターが大群で接近中! アクセルに居る冒険者の皆様はすぐに冒険者ギルドへ来てください!!!』

水を差すように緊急警報が鳴り始めた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:
:

第十八話　ダーカーの襲撃

アクセルの街の外

遠方から多くのダーカーの群れが迫って来た。

サトシ「あれがダーカー……」

創介「ああ、本来この世界には存在しない人類の敵だ。」

ギルド職員「皆様だけが頼りです！武運を祈っています！」

デストロイヤー襲撃事件から暫くアクセルに住んでいたアランとマノンも戦いに参加していた。

アラン「行くぞ！」

冒険者達「ウオオオオオオオオオ!!!」

アランの一声により、冒険者達はダーカー達と戦いを挑んだ。

サトシ「アラン!？」

創介「サトシ、言っておくが彼はお前の知るアランじゃねえ、ただのそっくりさんだ。」

創介はサトシにそう言っただーカーの群れへ単独突撃した。

創介達はダーカー達と戦い暫くすると、超大型ダーカーのダーク・ラグネが現れた。

創介「ここは俺に任せろ！」

創介は他の冒険者達にこの場を任せるように促しダーク・ラグネと対峙した。

セレナ「わ、私達も！」

サトシ「ああ！」

セレナはクラスエッジ、サトシはクラスダブリスを装備し創介と協力した。

サトシとセレナは初めて自分自身で戦うのだが戦い慣れていた。

創介（加勢されるのは嬉しいが……なぜ2人はあんなにも戦い慣れているんだ？いや、まずはこいつを斃すのが先決だ。）

すると創介の周りにクラスの武具達が現れその武具達と共に連続で攻撃し、武具達をダーク・ラグネの周囲に降り注がせ最後にク

ラーズサーベルで叩き斬り、ダーク・ラグネは爆散した。

創介「ふう：こんなもんかな。」

ダーク・ラグネが指揮系統だったのかダーカー達は撤退していった。

創介「大丈夫か？2人とも。」

サトシ「ああ。」

セレナ「うん。」

すると何者かがサトシを拐おうとしたがいち早く気づいたセレナはサトシを庇い、セレナは何者かに拐われてしまった。

創介「セレナちゃん!？」

サトシ「セレナ!？」

セレナを拐ったのはエルミルだった。

エルミル「いやー、まさか創介セシバイより質の良い依代が居るなんて思っても見なかったよ。」

創介「セレナちゃんをどうするつもりだ!？」

エルミル「決まってるよ。ダークファルス【猛獣】ビーストの依代にさせてもらうよ。」

創介「なんだって!？」

サトシ「させるもんか!!」

サトシはクラースダブリスでエルミルに斬り付けるがエルミルは禍々しい剣でサトシを弾き飛ばした。

エルミル「それじゃあ、彼女は貰って行くよ。」

サトシ「セレナーラー!!!」

サトシはエルミルに連れ去られるセレナを掴もうと手を伸ばすが、彼が掴めたのはセレナの紅いスカーフだけだった。

サトシ「セレナ……………」

セレナがエルミルに攫われて翌日、巨大な映像が流れた。

エルミル『やあ。僕の名はエルミル。この世界の新たな魔王にしてこの世界を滅ぼす者。たった今、世界を滅ぼす存在が生まれた。その名はダークファルス【猛獣】ビースト。精々世界の最後の日を過ぐすんだね。

アツハハハハハ!!」

創介「…エルミルめ……!」

創介は怒りに震え拳を強く握るが、創介はサトシがどこかへ行こうとしていることに気づいた。

創介「……セレナを助けに行くつもりか?」

サトシ「…当たり前だ。」

創介「……俺も行こう。」

サトシ「え……?」

創介「俺も最初からセレナを助けるつもりだ。」

サトシ「創介……」

ヒツギ「私も行くよ。私は全てを救うって決めたから。」

カズマ「俺も行くよ!」

アクア「【^{ビースト}猛獣】だが高んだか知らないけどぶっ飛ばしてやるんだから!」

ダクネス「貴族として、この世界を守ろう。」

めぐみん「我が爆裂魔法でそのダークファルス【^{ビースト}猛獣】とやらを消しとばしてあげましょう!」

創介「セレナごと消し飛ばす気か!」

「……コホン、行こうぜ。セレナを助けに!」

サトシ「……ああ!」

創介達はセレナを奪還する為、魔王城へと向かった。

t o b e c o n t i n u e d ……

第十九話 ダークファルス【猛獣】（ビースト）

創介達はセレナを奪還する為に魔王城へと辿り着いた。

サトシ「あれが魔王城……」

創介「恐らく、あの城の中にセレナちゃんが……」

すると城から多くのダーカー達が現れた。

めぐみん「ここは我が爆裂魔法で……」

カズマ「待てめぐみん！いくらお前でもあの数は斃しきれないぞ
!？」

ヒツギ「なら、ここは私が！」

ヒツギがこの場を引き受けようとしたその時！

創介の背後から現れた蒼い無数の光弾と白い無数の光弾がダー
カー達を薙ぎ払った。

ダクネス「今のは!？」

創介達は背後を振り返ると二人の女性が居た。創介は二人を知っ
ていた。

創介「マトイ!? ハリエットまで!？」

カズマ「知っているのか？」

創介「ああ、一緒に戦った事があつたんだが……一体誰が?
すると白い服を着た女性が現れた。

??? 「決まってるんだろ。あたしが此処に喚んだからだ。」

創介「アルマ!?! いや、その口調は……まさか!?!」

クラリスクレイス

初代 C C 「ご名答! 神様から頼まれてお前を助けに来たんだ。」

ハリエット「此処は私達にお任せを! 守護輝士、ガーディアン後を頼みます!」

マトイ「サトシ、君は君を待っている人を助けてあげて!」

ヒツギ「創介、サトシ、信じてるから!」

創介「判った。頼んだぞ!」

創介達はこの場を初代 C C、マトイ、ヒツギ、ハリエットにこの場
を任せ、魔王城へと入っていった。

魔王城内部

創介達は魔王の玉座へと向かっているとなんとダークファルス達が創介達の前に立ち塞がった。

サトシ「何だ!?!」

創介「【エルダー巨軀】に【ルーサー敗者】、【アブレンティス若人】に【ダブル双子】まで!?!」

カズマ「ここは俺達だ!」

創介「駄目だ! 奴らは危険すぎ…!」

創介が言いかけたその時、何者かがダークファルス達の前に立ち塞がった。

メタルギアライジングリベンジェンスより

〔ジエツトストリーム・サム戦BGM〕

創介「お前は…: 鋼電!?!」

鋼電「よお、久しぶりだな創介。」

「ここは俺に任せておきな。」

カズマ「俺も戦う!」

アクア「私もよ!」

めぐみん「私も!」

ダクネス「私も協力させてくれ。」

創介「みんな…: …: すまねえ!」

創介はサトシと共に玉座へと向かった。

鋼電「オーケー…: …: いざ参る!!!」

鋼電は紅い刀の高周波ムラサマブレードを構え、カズマ達と共にダークファルス達に立ち向かった。

〔ここで音楽が終わる〕

創介とサトシはエルミルが待つ玉座の間へと辿り着いた。

サトシ「エルミル…: …: !」

エルミル「ああ、来たんだ創介、センパイそしてサトシ君。」

創介「セレナちゃんは何処だ!」

するとエルミルは可笑そうに笑い出す。

創介「何が可笑しい!?!」

エルミル「アツハハハハハ! 既に手遅れさ!」

……
するとエルミルの背後にあった繭が碎け散り、そこに現れたのは

ダークファルスと化したセレナだった。

創介「な……」

サトシ「そんな……」

エルミル「アツハハハハハハハ！良いね！その絶望に満ちた顔！実に滑稽だよ！」

エルミルはそういうと姿を変えてエルガ・マスカレーダへと姿を変えた。

エルミル「それじゃ始めようか！この世界の存亡を賭けた闘争を!!!」

創介「……何も消せはしない！」

サトシ「……セレナ、待ってて！すぐに、助けるから!!!」

【セレナ猛獣】「……」

創介とサトシは武具を持ち、この世界の存亡を賭けた戦いに挑む。

t o b e c o n t i n u e d ……

最終話 幻創の星（ファンタシースター）

ゼノブレイド2より

{Drifting Soul}

サトシ 「セレナ、やめてくれ！俺は君を助けに来たんだ！」

【猛獣^{セレナ}】 「……………」

サトシはダークファルスとなったセレナを助けようとするがセレナの猛攻に押されていた。

エルミル 「無駄だよ！今の彼女はダークファルス。君の知っているセレナはもう消えたんだよ！」

創介 「てめえは黙ってろ！」

創介はエルミルと対峙し、サトシがセレナを助ける事を祈っていた。

サトシ 「俺は、君と一緒に未来へと歩みたいんだ！」

「これから先、どんな困難や苦難が待ち受けていようと俺は君を護ってみせる！」

【猛獣^{セレナ}】 「……………」

サトシ 「判るんだ！君が傷ついているのが！」

「みんなが……シトロロンやユリーカ達が今でも俺達が帰ってくる事を待っているんだ！」

「俺は君を……助けたいんだ！あ幼い頃出逢ったあの日の時のように！」

【猛獣^{セレナ}】 「サト……………シ……………」

サトシ 「だから……………だから……………」

「帰ってきてくれ！セレナ！」

サトシはセレナへ手を伸ばし、その手を掴んだ。その時、眩い光が辺りを包んだ。

{ c o u n t e r a t t a c k }
ゼノブレイド2より

エルミル「それは……まさか……再誕の力を我が物にしたのか!?」

眩い光の中に、二つの色があつた、一つは全てを癒す蒼い光、一つは全てを灼き焦がす紅い光、そして光が晴れた場所には、波動の勇者と呼ばれた者が着ていた服を纏ったサトシと巫女のような服を纏ったセレナが居た。

サトシとセレナの眼は紅く染まっていた。まるでもう一つの魂と融けたかのように……

サトシは蒼い刃の両ダブルセイバー剣を、セレナは紅い刃の大剣ソードを召喚する。

サトシ「行こう、セレナ。」

セレナ「うん。」

二人は武器を構え、エルミルに立ち向かった。

I D O L A P h a n t a s y S t a r S a g a よ

り

（オープニングテーマ）

サトシとセレナは凄まじい強さと連携攻撃でエルミルを圧倒していた。

エルミル「…クツ…!!」

エルミルは止むを得ず三体の黒い分身のマスク・クローネを召喚するがサトシはルカリオ、セレナはマフオクシーを召喚した。

アローンのルカリオ「行くぞ、サトシ」

サトシ「ああ！」

マフオクシー「うちの力、見せたる！」

セレナ「うん！」

セレナはマフオクシーと共に大剣ソードを持ち、大きく振り下げ、マスク・クローネを巨大な火柱で灼き焦がした。

セレナ&マフオクシー「エンドブレイズ・セイバー!!」

エルミル「なんだと…!？」

アローンのルカリオ「見えざる世界の軸よ！うね畝りを起こせ！」

サトシが召喚したアローンのルカリオは高く跳び上がり凄まじい回転を付け、波動で生成したダブルセイバー両剣で斬り付けた。

アローンのルカリオ「ローリング・セイバー！」

エルミル「ガハッ…!!」

サトシ「天に輝け！導きの星の光よ！」

サトシはダブルセイバー両剣に波動を纏わせ、エルミルを連続ですれ違いざまに斬り付け、ダブルセイバー両剣に更なる波動を纏わせ、渾身の三連撃を放った。

サトシ「ノーティカルバスター!!」

エルミル「グアア!!」

サトシの渾身の三連撃でエルミルは態勢を崩した。

セレナ「サトシ！」

サトシ「ああ！」

ファンタシースターオンライン2より

{The Whole new World}

サトシはセレナと共に大剣ソードを持ち、天へ掲げる。

サトシ&セレナ「この一撃で、全てを終わらせる！」

サトシとセレナは大剣ソードに超巨大な刃を纏わせ、エルミルへと斬り付けた。

サトシ&セレナ「未来スを紡ぐ大いなる星の剣ゲイザ!!!」

エルミル「この僕が……ガキ如きに……!!!」

エルミルは最期にそう言い残し真つ二つに斬り裂かれ、爆散した。

{ここで音楽が終わる}

アクセルの街

めぐみん「…本当に…行くんですか？」

めぐみんは寂しそうに創介、サトシ、セレナに言った。

創介「ああ。俺は二サトシとセレナ人を元の世界に帰すつて言う仕事があるからな。」

カズマ「…戻ってくるのか？」

創介「この仕事が終わればの話だ。必ず戻るよ。」

創介はそう言つて神より授かった世界を越える力を使い、ゲートを造る。

創介「行くぞ。」

サトシ「…とても短い間だったけど、みんなと出逢えて、本当によ

かった。」

セレナ「私も。」

サトシとセレナは共に手を繋ぎ、創介の後を追った。

その後、サトシとセレナはこの世界を救った英雄として讃えられ、サトシは波動の勇者、セレナは煉獄の妖狐と呼ばれるようになり未来永劫、永遠に語り継がれる事になった。そして、クラーズ教は創介の教えにより、世界は永遠の平和が約束された。

物語は、集結する。

Trinity Journey 一つめの世界

創介「よつと、着いたぜ。」

サトシ「やつと帰ってこれたんだな。」

セレナ「早くみんなに会わないと!」

とある人物により紅く染まった大地と空のカロス地方。この世界に、三人の旅人が訪れた。

創介は二人を送り届け元の世界へ帰ろうとするが突然遠方から爆発音が響いた。

創介「なんだ!?!」

サトシ「行ってみよう!」

創介、サトシ、セレナは音のする方へ向かった。

創介達が音のする方へ辿り着くとそこにはもう一人のサトシとセレナや他のポケモントレーナーらしき人物達が巨大な紅いジガルデと対峙していた。

創介「これは……!?!」

「……なるほど。そういうことか……」

サトシ「え?」

セレナ「創介?」

創介は自分の近くにサトシとセレナが居るのに何故向こうにもサトシやセレナが居る理由を察した。

創介「ここは……俺の世界のサトシとセレナの世界なんだ。」

サトシ「どう言う事なんだ?」

創介「言葉通りの意味だ。サトシ、お前が俺の事を紹介って呼んだら?そしてその紅介とか言う奴は俺と顔が瓜二つだったって言ってただろ?ならそれって並行世界パラレルワールドって奴だな。」

セレナ「並行世界?」

創介「並行世界パラレルワールドってのはもしもの世界……もしくは分岐した世界と

いう事で、紅介とか言う奴は恐らく、名前が違っていた世界線の
創介^{俺自身}についていう事だ。」

サトシとセレナが意味がわからないのか首を傾げ頭上に？マーク
を浮かべた。

創介「……簡単に言えばもしもサトシとセレナが結婚したりとかも
しもサトシが別の夢を持っていたらとかさう言うもんだよ。」

セレナ「私がサトシと結婚?!?!?!」

創介「あくまで例えだ！お前達が俺の事を紅介って呼んだなら、お
前達は並行世界^{パラレルワールド}を越えて俺達の世界に来たって事になる。」

サトシ「じゃあそれって……」

創介「ああ。この世界は、お前達が居た世界じゃない。」

サトシとセレナ「え………?」

創介「生憎だが、俺の世界を越える力でも流石に並行世界^{パラレルワールド}は越える
事は出来ない。でも、確証は無いが手段はある。」

「……いや、今は暴走^あジガルデ^いを止めるのが先決だ。」

サトシ「…そうだな……!」

セレナ「うん!」

創介達はこの世界のサトシ達と助太刀しに向かった。

だが自分達とは別の異物が在る事を知らずに……

t o b e c o n t i n u e d ……

助太刀と異物

暴走ジガルデの放つ蔦がこの世界のサトシとセレナを貫こうとしたその刹那、創介と行動を共にするサトシとセレナが間一髪で蔦を防ぎ、この世界のサトシとセレナは事なきを得た。

この世界のサトシ「俺が……もう一人!?!」

この世界のセレナ「私が……もう一人!?!」

自分を助けたのはまさかの自分自身だった事にこの場に居る全員は驚きを隠せなかった。

創介「なんとか間に合ったみてえだな。」

すると創介も駆けつける。

フラダリ「貴様ら……!?!」

創介「フラダリ、お前の言う美しい世界は俺に言わせりゃあ醜い、醜すぎる。」

創介は唐突に語り出す。

創介「いいか？俺の求めるこの世界の美しい世界ってのは人とポケモンが共に未来へと歩む姿だ。そうだろ？サトシ。」

サトシ「当たり前だ!?!」

創介達はフラダリを止める為、武器を構える。

フラダリは右腕の機械で創介を始末するようにジガルデを操作しようとしたその時、

???「オラア!?!」

フラダリ「なに!?!」

突如現れた少年に機械は斬り壊された。

創介「鋼電!?!」

鋼電「よお。神様からお前達に贈り物を届けるように頼まれて此処に来たんだが……忙しそうじゃねえか?」

創介「まあ今これから忙しくなりそうだけどね!」

鋼電「助太刀するぜ。友達を見捨てたくはないからな。」

鋼電はそう言って創介の隣に立ち高周波ムラサマブレードを構える。

創介達はジガルデと立ち向かおうとしたその時、赤黒い光が暴走ジガルデを包み込み始めた。

創介「これは……：ダーカー因子!？」

フラダリ「な、なんだこれは……：ああああああ!!!」

フラダリはダーカー因子に侵蝕され絶命した。

???「これは!?!?皆さん、大変です!!」

すると創介の近くに浮遊していたマグから音声が流れる。

創介「その声は……：シエラ!？」

シエラ「ジガルデから強大なダーカー……：いえ、ダークファルスの反応です!」

創介「ハア!？」

シエラ「このままでは、マノンさんのハリマロンがダークファルスへと変化してしまいます!」

鋼電「つまり、そのマノンとやらのポケモンがダークファルスとやらになり始めているって事か?」

セレナ「!」

セレナは自分がダークファルスになった事を思い出す。

セレナ「……：させない……：絶対させない!」

創介「……：そうだな。セレナの言う通りだ。なんとしてでも、ハリマロンを助け出すぞ!」

鋼電「なら、これを使いな。」

鋼電が創介に渡したには白い日本刀だった。

創介「これは……：天叢雲!？」

鋼電「そいつは肉体を傷つけずにエネルギーのみを斬り裂くって聞いたぜ。」

サトシ「じゃあそれなら……」

創介「ハリマロンを助け出せる!」

ハリマロンを救える可能性を見出した創介達は武器を構える。

鋼電「活路は俺が開く。」

鋼電はそう言って先陣を切り迫り来る無数の鳶を高周波ムラサマブレードで斬り裂き、創介は止まらずジガルデへ一直線で走る。

サトシ「こっちの俺！ゲッコウガを借りるぞ！」

この世界のサトシ「え!?あ、ああ……」

サトシ「ゲッコウガ、水手裏剣！」

ゲッコウガ「コウガ！」

ゲッコウガは巨大な水手裏剣をサトシと合わせて同時に放った。

サトシ「マークスターライザー！」

ゲッコウガの放った水手裏剣とサトシの両ダブルセイバー剣は暴走ジガルデの身体を削り、体内への道が開き、創介は暴走ジガルデの体内へと入り込む。

創介「あれか！」

創介はハリマロンを見つけ、障害を天叢雲で斬り伏せながら駆け出す。

創介「不浄を斬り裂け、天叢雲よ！」

創介はハリマロンの身体を傷つけずにダーカー因子のみを斬り裂いた。

創介「ついでにこれも！」

するとハリマロンとZ2を抱えた創介がジガルデから出てきた。

マノン「ハリマロン！」

創介「大丈夫、気絶しているだけだ。ここは危険だから早く逃げろ！」

創介はマノンを逃し、暴走ジガルデの方へ振り向く。

創介「さて、やりますか。」

無限のフロンティアEXSEEDより

(必勝への軌跡(Ver. EF EXSEED))

セレナ「マフオクシー、いくよ！」

マフオクシー「せやな！」

セレナ&マフオクシー「エンドブレイズ・セイバー!!!」

セレナとマフオクシーは共に大剣ソードを振り下げジガルデを巨大な火柱で包み込む。

サトシ「ルカリオ！」

アーロンのルカリオ「ああ！」

「見えざる世界の軸よ！」

サトシ「天に輝け！」

アーロンのルカリオ「敵^{うね}りを起こせ！」

サトシ「導きの星の光よ！」

アーロンのルカリオ「ローリング・セイバー!!!」

サトシ「ノーティカルバスター!!!」

サトシとアーロンのルカリオは見事な連携攻撃を放ちジガルデの
体勢を崩す

創介「これぞ、世界を形作りし創世の光！」

クラーズ・ザ・ジエネシス・オブ・ルクス
「光纏し創世の光!!!」

創介はとどめと言わんばかりに無数の色鮮やかなレーザーを放ち、
ジガルデを跡形もなく消しとばした。

（ここ）で音楽が終わる

創介「よし！異変解決。…なんてな。」

すると近くで何かが落ちるような音を聞き、創介は音のする方へ見
ると波動の勇者の帽子が地面に落ちていた。

創介「おいサトシ、帽子を落とし……………え？」

創介はとある光景を見て思考が停止した。

サトシ「どうしたんだ？」

創介「ああ……………サトシ……………セレナ……………自分の頭と腰、触ってみたら
どうかな？」

サトシ&セレナ「え？」

創介「ああ……………こうしたほうが早いかな……………」

創介はそう言って鏡を取り出してそれをサトシとセレナに見せた。
そして映っていたのは……………

ルカリオのような獣耳が生えたサトシとフォッコのような獣耳が生えたセレナが映っていた。

フオツコのような獣尻尾が生えていた。

すると獣耳と獣尻尾は光の粒子となって消えていった。

セレナ「あ……戻った……」

創介「あれって力を過剰に使うと出てくるやつなのかな？」

鋼電「機械に例えるなら冷却装置ってやつか？」

創介「多分そうかも。」

「あ、そうだ。戦う前にパラレルワールド並行世界を越える可能性があるって言うって
ただろ？」

「もしかすればこの方法なら行けるかもしれない。」

創介はそう言うつとある力と複合してゲートを作った。

創介「やっぱりか。」

セレナ「やっぱり？」

創介「ああ。実は俺、時間遡行つて言う力を持っていてな。本来こ
いつは未来の俺【仮面】の力なんだが、なんとか使えたな。」

鋼電「創介、サトシ、セレナ、コレを渡すよ。」

そう言つて鋼電が渡したのは三個のアタッシュケースだった。

するとアタッシュケースは勝手に開き、黒い衣が三人を包みその服
はまじないの世界に精通する者が着ると言う衣装のカーズコート
だった。

サトシ「これは……」

鋼電「神様がこうなる事を予測していたからつてき。」

創介「予測していた？」

鋼電「ああ。お前が世界を越える力と時間を越える力と複合して
ゲートを開いてパラレルワールド並行世界を越えるつて聞いたがどうやらが行き先は
ランダムだし暫くどんな世界に行くかはランダムで決まるのさ。」

セレナ「じゃあもし人間が存在しない世界に来たならこれを着てい
てつて事なの？」

鋼電「そうなるな。」

創介「なるほど、ありがとな鋼電。……つてかお前これからどうすん
だ？」

鋼電「とりあえず、フレア団の残党を懲らしめに行くよ。」

鋼電はそう言っただどこかへ去っていった。

創介「…それじゃあ、俺達も行くか。」

サトシ「そうだな。」

セレナ「うん。」

三人はフードを被り、蒼波が居る並行世界パラレルワールドへと向かった。

創介「ここが…次の世界か。」

創介が辿り着いたのは森林の中だった。

セレナ「ねえ！あれ！」

セレナが指差す方にはライオンやワニ、ゴリラなどの動物の顔が彫られてあつた巨大な岩石が宙に浮かんでいた。

サトシ「あれは……」

創介「…行つてみるか。」

創介達は巨大な岩石へと走り出した。

t o b e c o n t i n u e d ……

アニマル戦士の世界

創介「これは……」

創介達が隠れ潜みながらみた光景は様々な獣人達が争い合っていた。

創介「こいつは一体……」

するとマグから通信が入る。

シエラ「創介さん！」

創介「シエラ!?!」

シエラ「実は神々より貴方へもう一つの贈り物です！」

すると創介の近くにPSO2最強武器の光纏クラースのような雰囲気の剣と斧が現れた。

シエラ「それでは、頑張ってください！」

創介「あ、ああ。」

創介を剣を取り振ってみると剣の刃が伸び、鞭のようになった。

創介「…蛇腹剣ってやつか……」

創介はこの剣を光纏こうてんけん剣クラースソードと名付け、斧は光纏こうてんふ斧クラースアックスと名付けた。

サトシ「……」

創介「サトシ?」

サトシは何も言わずに何処かへ走っていった。

セレナ「サトシ!」

創介「セレナ、お前はサトシを頼む。」

セレナ「創介は?!」

創介「俺はこの戦いを終わらせてくる。」

セレナ「わ、判ったわ!」

創介はこの戦いを終わらせる為に戦場へと向かい、セレナはサトシを連れ戻しに行った。

場面は変わり、ライオン神殿で……

クラツガー「諦めなラバル。お前に勝ち目は無え。イーグル族も助けには来ないぜ？それにゴリラ族もここには辿り着けはしねえ。状況をよく見ろよ。」

ラバルは周囲を見渡した。

クラツガーの言う通り状況は劣勢だった。

??? 「勝ち目は無い？助けは来ない？なら、俺はどうなんだ？」

すると突如少年の声が響いたと同時に蒼い一筋の光が差し込んで来た。

ファイアーエムブレム風花雪月より

〔フレスベルグの少女〕

光が差し込んだ場所には黒い衣を纏い、フードを目深く被った少年

が居た。

ウオリズ「なんだてめえ？邪魔をするなら容赦は…」

ウルフ族のウオリズが言いかけたその時、少年は持っていた剣を横に薙ぎ払うと少年の周囲に居たアニマル戦士達は吹き飛ばされた。

ラバル「あれは一体……？」

クラッガー「なんだよありやあ!？」

少年はラバルとクラッガーが居るライオン神殿へ大ジャンプし、二人の間に立つ。

ラバル「君は……」

創介「俺の名は創介……この戦争を終わらせる者だ。」

創介はフードを取り素顔を二人に晒し、二人は信じられない物を見たような顔をした。

なにせこの世界にはライオン族、ワニ族、ゴリラ族、イーグル族、カラス族、ウルフ族などの部族があるのに彼はどの部族にも属さない顔つきをしていた。

クラッガー「なにがなんだが知らねえが邪魔をするなら死んでもら……」

創介「不浄を断ち斬れ、あめのむらくも天叢雲」

創介はクラッガーの台詞を遮りクラーソードから天叢雲へと持ち替え、クラッガーを狂わせていた不浄を断ち斬った。

ラバル「クラッガー!!」

創介「心配はいらない、肉体は無傷だ。」

ラバル「何を言つて……え!？」

創介の言う通りクラッガーは無傷だった。

クラッガー「……俺は……一体？」

ラバル「クラッガー!」

クラッガー「ラバル？確か俺はみんなとチームの平和会議をしていた筈なんだが……なにか……取り返しのつかない事をしかけたよう……」

すると創介はサトシとセレナの気配を感じ取る。

ラグラビス王「あれは……!？」

サトシとセレナは巨大なワニに乗っていた。

そしてセレナの背後にはクラッガーの母親のクランケット王妃が居た。

創介はラバルとクラッガーを連れてサトシとセレナの元へ駆けつける。

創介「サトシ！お前今まで何処に!?!」

サトシ「実はこのワニが助けを呼んでいて声のする方へ行ったらこのワニが何かを引っ張られているように身動きが取れなかったんだ。」

セレナ「その時に黒い服を着た人が手伝ってくれてこのワニの背中にこの人が居て、ここまで運んでくれたの。」

創介「なるほどな」

クラッガー「なあ！お前ら、サトシとセレナとか言ったか!?!見ず知らずなのに俺のおふくろを助けてくれて本当にありがとう!」

クラッガーはサトシとセレナにお礼を言う。

創介「なんだか知らねえけど良かったな。」

ラバル「そうだね。」

創介「それと、教えてくれ、今まで、何があったんだ?」

ラバル「…全部話すよ。」

ラバルは創介達にこれまでの出来事を話す事にした。

t o b e c o n t i n u e d ……

アウトランドへの出立

創介「…そんなことがあったのか…。」

創介はラバルから今までの出来事を全て聞いた。

創介「…：俺達も手伝わせてくれないか？」

ラバル「え？」

創介「俺達は目の前で起こってる世界の危機を見逃すほど屑じゃねえからな。」

サトシ「俺も手伝うよ！」

セレナ「私も！」

創介達はこの世界を救う為、ラバル達と行動を共にする事になった。

そして翌日、アウトランドの境目で、

アウトランド近辺

サトシ「…ここで王妃様と巨大なワニを見つけたんだ。」

克蘭ケット王妃「ええ。全ては覚えていないけどあの事故で二つの重要な事が解つたの。」

克蘭ケット王妃は数年前、とある事故で夫、もといクラツガーの父親のクロミナス王と共に底無しの淵へ落ちたのだが底無しではなかったため二人は生き永らえたのだが数年もの間暗い洞窟を彷徨っていた。

二人はひたすら出口を探したが洞窟は何かを企むかのように二人を邪魔した。

二人は諦めかけたその時、なんとチが上から降ってきたのだ。

チとは、ラバル達が居る世界に存在する生命の結晶でそれを使うと一定時間だけだが強大な力を手に入れることができるのだ。

チがあれば打開策は見つかる。そう思っていたが、二人に落ちた奇跡は二人を滅ぼしかねない…いや、この世界を滅ぼしかねない奇跡と化した。何故なら底無しの淵の底に住む者達はチの力により、恐怖と

化し、チの力により大きく強く、知恵を持った。

だが彼らはただ一つの欲望を持った。

それはチを手に入れる。ただ一つの欲望だった。

クロミナス王はカボラ山がチの源だと教えた。

そうして地上へ案内させ、逃げようと考えた。

だが彼らはカボラ山の滝の水を止めチを全て奪う事を思いついた。

二人は必死に走って逃げた。だが気付けばアウトランドに深く入り込んでいた。

そして彼らは想像を絶する力を持っていた。

克蘭ケット王妃は気が付くとワニの伝説のビーストの背中に居た。そして奇妙なヘルメットを被った誰かに囁かれ、彼女は意識を取り戻した。

克蘭ケット王妃は教えた。彼らは伝説のビースト達を捕まえ、全てのチを奪おうとしている。邪魔は許さないだろうと克蘭ケット王妃はそう言った。

創介「…そりやあ余計にこの世界を助けたくなくなったな。」

エリス「ところで、誰かロゴンを見た？」

イーグル族の少女、エリスは知り合いのサイ族のロゴンがどこに居るか尋ねると遠方から装甲車のロックフリンガーが来た。

ロゴン「お待たせー！」

ラバル「ロックフリンガー!? 身軽に行くって言ったでしょロゴン。アウトランドで生き延びるにはシャドウウインドみたいに素早く動けなきゃ！」

シャドウウインド。謎に包まれたスピードーズレーサー、その腕前は一流に等しく正体は誰も知らないとにかく謎に包まれたレーサーである。

ロゴン「何言ってるの? 十分身軽でしょ?」

創介「どこがだよ……」

創介はロゴンにツツコミをする。

エリス「でも、一つぐらい大きな乗り物があったほうが荷物を運べて良いんじゃないかしら?」

セレナ「一理あるかも。」

ラバル「…良いよ判った。でも運ぶのは本当に大事な荷物だけにしてよね…」

ロゴン「勿論さラバル。僕は本当に大事な物しか持っていないよ。」

クラツガー「そういえばよ、お前ら乗り物あるのか?」

創介「いや、無いな。」

すると創介の服のポケットからいつの間にか在ったのかスマホがあつた。

創介は恐る恐る電話に出た。

創介「も、もしもし?」

このすばのエリス「創介さん、聞こえますか?」

創介「エリス様!」

創介の発言に一同はこの世界のエリスを見る。

レゴチーマのエリス「え?私?」

創介「ああいや違う。実は俺の知り合いにエリスって言う幸運を司る女神が居てね。」

ロゴン「エリスが女神!」

創介「違う、ただの同名で中身は別人だから。」

創介は誤解が生まれないように言う。

創介「どのような用件で?」

このすばのエリス「実は創介さん、サトシさん、セレナさんに贈り物があるんです。是非役立ててください!」

このすばのエリスは通信を切ると近くに近未来風な見た目の蒼いバイクとルカリオをイメージしたようなカラーリングのバイク、そしてマフオクシーをイメージしたようなカラーリングのバイクが現れた。

創介「おお!」

創介達は早速バイクに乗り込む。

ラバルは父ラグラビスから少数のチと盾を託され、クラツガーは克蘭ケット王妃からクロミナス王が使っていた武器を託され、

スカンク族のスピネットから瓶詰めを貰い、創介達は伝説のビースト達を救う為、アウトランドへと入っていった。

t o b e c o n t i n u e d

追放されたライオン族

ラバル達と行動を共にする事になった創介、サトシ、セレナはアウランドへ入った直後、コウモリ族の襲撃に遭うがロゴンのおかげによりコウモリ族を退く^{しりぞ}がロゴン曰く小さな家を通ったと言い、ラバルと創介達はその小さな家を訪れた。

ラバル「わあ……！チーマの誰かが建てたみたいな家だ！」

クラツガー「誰がこんな所に住んだ？ってわぁー！？」

創介、サトシ、セレナはすかさず避けるがラバル達は罠に捕まってしまうた。

ウオリズ「非常に警戒心が強い奴とか？」

セレナ「今助k……」

創介達が助けようとした時家の扉が開き、創介達はすかさず武器を構える。

???「フッフッフッフ……侵入者よ、諦めることだな。

………カップケーキは人数分ないよー」

サトシ&セレナ「え？」

創介「ハア!？」

???「今度お客を連れて来る時は教えてくれよ。クロツキー。」

サトシ「クロツキーって………」

???「ああ。この子の事だよ。」

ライオン族の男はワニのビーストにカップケーキを食べさせながらそう言った。

クラツガー「伝説のビーストがカップケーキだと!？」

ブラビツク「あのカップケーキ美味しそうだなあ！」

???「ここらの住人は普通この道を通り抜けられないんだがなあ。」

エリス「あの障害物コースの事？」

創介とラバル達はコウモリ族の襲撃から逃げている時にレースゲームでありそうな障害物があったのだ。

???「そうそう。ちよつとご近所さんと上手くいってなくてね。こう

いう奴ら……」

するとライオン族の男はコウモリ族達のモノマネなのか奇声などを発した。

ラバル「ねえ、僕達を出してよ！大事な使命があるんだ。チームのうんむわああああああああ!!!」

ラバルが言いかけた時にライオン族の男は罨を解除してラバル達を落とした。

???「WWWチームのうんめうわあああああか？立派すぎて涙が出てくるなあ。それじゃあヒーロー殿、あいつらに見つかる前に入ってくれ。その見慣れない人達も。」

クラツガー「あいつを信用するのかよ？」

エリス「そうだけど、ここへ来てから戦いっぱなしよ。休まなきゃ。」

ラバル「そうだね、でもみんな、油断しないで」

サトシ「あの人は嘘についてなかったから大丈夫だよ。」

創介「そんじゃあお邪魔しまーす。」

創介達はライオン族の男の家にお邪魔した。

エリス「…凄い所ね。」

ウオリズ「あの鎧をってみろ！」

ロゴン「それにこの岩も！」

グラビツク「カップケーキだ！」

ゴーザン「花もある！」

ラザール「盗む物も一杯…じゃないあー…つまり、欲しくなる物ばかりかーね。」

ラバル「油断しちゃダメだ！離れないで！………とここで仲間のライオン族はみんな知ってるけどあなたは見たことない」

???「勿論さ私はわるーいライオンで彼らに追放されたのさ」

創介「追放？」

ラバル「え!?追放されたって!?僕が知ってる追放されたライオンは……ラベルタス……?」

ラベルタス「…その名前で呼ばれるのは本当に久しぶりだよ。懐か

しいな。」

クラッガー「えつと……正確にはどれくらい悪いライオンなんだ？」

するろラベルタスは創介、ラバル、クラッガーを睨み始め、創介は思わず臨戦態勢に入るが……

ラベルタス「…なんてな、ところで私のトレーニング人形を見るかい？」

ラバル「え!? トレーニング人形があるの!？」

ラベルタス「ああ。名前は元祖相棒君。」

ラバル「本当に!? 僕にも見せて！」

クラッガー「ラバル、油断しちやダメなんだろ?!」

創介「おいおい……」

突然ラベルタスが創介とクラッガーを驚かした。

ラベルタス「驚いたか? 見事にチームがバラバラだろう? 殺ろうと思えば一人ずつ始末も出来る。」

クラッガー「ワニ!？」

創介「おいおい、俺を舐めたらいかんぜよ?」

ラベルタス「うそうそ、殺らないよ。……それとも? ……なーにからかっただけだよ。」

クラッガー「そ、そうだよな。」

ラベルタス「…と油断させて……」

クラッガー「うわあ！」

ラベルタス「悪い悪い、で、父親に会いたいか?」

クラッガー「ワニ!？」

ラベルタスの発言にクラッガーは驚いた。

創介「クラッガーの親父さんを知って……」

ラベルタス「あーおいおい! そのドアは開けちやいかん。」

エリスはラベルタス曰く開けちやダメなドアの鍵穴を覗いていた。

エリス「…でも何か光ってる。」

ラベルタス「あーあれはただの……気にする事はない。」

クラッガー「何で親父の事を知ってる!？」

ラベルタス「ツハツハハハ！まあ落ち着け。彼がお前の父親かはわからんが…あの蜘蛛が年寄りのワニを捕まえたには確かだ。それに、伝説のビースト達クロツキーの友達もな。」

ラベルタスはそう言いながら壁に掛けられた地図を開くとそこに書かれてあったのはアウトランドの地図と囚われた伝説のビースト達の居場所だった。

セレナ「これって……」

創介「恐らく伝説のビーストの居場所だな。」

ラバル「これ…伝説のビースト達の居場所を知っているのに、何故…」

ラベルタス「助けないのかって？ハツハツハツハ！私には関係ない。コレは君達の問題だ。チームは遠い昔に私を追い出した。でも君らがここを使いたいなら作戦とやらの間、使っても構わんぞ。」

ラバル「凄く助かるよ、ラベルタス。」

ラベルタス「んー気にするな。退屈凌ぎさ。クロツキー以外、誰も話し相手がいないからな。」

創介「なら俺達がこの世界に来るまでの話でも聞かせてやるよ。」

ラベルタス「それは楽しみだ。…ところで、アウトランドにピツタリの新しい鎧を作ってる。誰か興味はあるかな？」

ラバル「ああ。ありがとうラベルタス！その鎧と地図があれば、伝説のビーストとチームを救える！」

こうして創介達とラバル達は全ての伝説のビーストを救うまでしばらくラベルタスの家に居候する事になった。

t o b e c o n t i n u e d ……

スパイダー族の牢獄

アニマル戦士達が暮らすチーマと呼ばれる世界に訪れた創介、サトシ、セレナはラバル達と出会いこの世界を救う為、ラバル達と共にアウトランドへと足を踏み入れる。アウトランドに隠れ住むライオン族の男ラベルタスと出会い伝説のビースト達を救う為暫くラベルタスの家に居候する事になる。

そして現在、ラベルタスが造った鎧を纏ったラバル達と創介達は伝説のビーストを探していた。

エリス「そういえば、創介とサトシとセレナはその服装のまま良いの？」

創介「ああ、俺達、結構強いから。」

クラツガー「それはいいとして、どこまで行きやあ良いんだ？」

ラバル「ラベルタスの地図によると、谷に伝説のビースト二頭居る。この辺りのはずだけど……」

創介「サトシ、お前波動で気配感知とか出来るか？」

サトシ「出来る。ちよつと待ってて……」

サトシは目を閉じ、集中すると遠方にある伝説のビーストラしき波動を感知した。

サトシ「……あつちの方向に伝説のビーストが二頭居る。」

セレナ「でも、植物があつてこれじゃあ通れない……」

創介「下がってる。俺の必殺技で道を開いて……」

創介は光纏クラリス・ザ・ジエネシス・オブ・ルクスし創世の光を発動しようとしたその時、どこからともなく装甲車のロックフリンガーが現れ、植物を轢き道を開いた。

サトシ「今のは……？」

創介「一体誰が操縦を？」

創介達とラバル達はロックフリンガーの元へ向かい、誰が操縦してたのか確かめると……

ロゴン「やっぱねー。友達が操縦してたんだよ。」

ロゴンが見せたのは操縦席に座った(?)笑った顔をした岩だった。

ロゴン「大丈夫、グラベルは操縦上手いんだよ。」

創介「いやどう見てもおかしいやろ!!」

創介は思わずツツコミをした。

途中からロックフリンガーに乗った創介達とラバル達は目的地へと辿り着いた。

創介「ゴリラとサイのビーストか……。」

創介達が見下ろすのはスパイダー族によって捕らえられたゴリラのビーストとサイのビーストだった。

創介「俺が奴等の気を引く。みんなはその隙にビースト達を助けてくれ。」

創介はそう言って谷底へ飛び降りた。

クラツガー「ハア!? アイツ飛び降りたぞ!」

創介は着地と同時にクラースソードを召喚し、スパイダー族の気を引いた。

ラバル「と、とにかく、ビースト達を助けよう!」

ラバル達はロックフリンガーに乗り込み、戦線加入した。

セレナ「サイのビースト、今助けるからね!」

セレナは炎でサイのビーストを囲むスパイダー族の糸を焼き、サイのビーストを解放した。

サトシ「今助けるぞ!」

同時期、サトシはゴリラのビーストを解放した。

創介「…よし、おまえら! 撤退するぞ!」

ラバル「うん! ……って創介達乗らないの!?!」

創介「大丈夫だ! 俺にはこいつがある!」

すると創介達はスマホを取り出し、今朝にこのすばエリスから授けられた三つ目の贈り物呼び出した。

その贈り物とはファンタシースターオンライン2に登場するキャンプシップだった。

創介、サトシ、セレナはキャンプシップに乗り込みラバル達と共にこの場を撤退した。

創介達はロックフリンガーへ乗り移り創介はある疑問を口に出し

た。

創介「…そういえば、あの時、誰がロックフリーンガーを動かしてたんだ？」

ロゴン「ああ。先程可愛い顔が描かれた岩が操縦メカニズムを操ると結論付けたが訂正させてもらう。あの時の操作活動を実際に行っていたのは、ここに忍び込んでいたサイ族のリノナだ。」

リノナ「ハイイロゴン。」

創介「このお嬢さんがロックフリーンガーを動かしてたのか？…つかロゴン頭良さそうな言葉使いな。」

ロゴン「ああ。サイ族はサイのビーストが近くに居ると頭脳明晰になるのさ。」

創介「それでそんな口調になったのか……」

こうして創介達とラバル達は伝説のサイのビーストとゴリラのビーストの救出に成功した。

t o b e c o n t i n u e d ……

ラベルタスの正体

ラベルタス「私の大切な物を盗んだのは誰だああああ!!!」

朝に突如響くラベルタスの怒号に創介達は目を覚ました。

創介「ど、どうしたんだよ?」

ラベルタス「泥棒にやられたんだ。あそこの鍵のかかった部屋にあつたのに!さては君の仕業か?」

エリス「え、私!?盗んでないわ!言いがかりはやめて!ラザールじゃない?盗みはカラス族の得意技でしょ?」

ラザール「褒めてくれて光栄かお客さん。残念ながら今回はうちじゃないかーよ?」

サトシ「じゃあ、一体誰が?」

セレナ「とりあえず、ラベルタスさん、私達が必ず盗まれた物を取り返してみせるから。」

ラベルタス「:わかった。私はしばらく外で気持ちを落ち着けてくる。」

ラベルタスはそう言って外へ行った。

ラバル「:ラザール、本当に盗んでない?」

ラザール「あー勿論かー。:でも、あんなに大騒ぎするのを見たら興味をそえられるかーよー!」

ラザールはそう言うのとラベルタス曰く開けちゃダメな扉の鍵穴をピッキングを始めた。

創介「おい!その部屋は:」

創介はラザールに制止しようとしたが既にラザールは鍵のかかった部屋を開けた。

ラザール「ああ!驚きかー!」

ラザールが入った部屋に創介達は入ると黒いヘルメットが置いてあった。

クラツガー「マジかよ!どうしてこれが!」

ラバル「これは:ヘルメットだよね:シャドウウインドの:。」

なんとそれは謎の凄腕レーサーシャドウウインドのヘルメットだった。

セレナ「サトシ、これって……」

サトシ「うん！間違いのないあの時ワニのビーストを助けてくれた人が被ってたヘルメットだ！」

ラバル「え!?サトシとセレナが出会った黒い服を着た人って、シャドウウインドだったの!？」

しばらくしてラベルタスが戻ってきて布で隠されているがスピードーズのメンテナンスをしていた。

ラベルタスは外で黄金に輝く大きな球を持っている巨大なカラスが見えた。

ラベルタス「見つけたぞ泥棒め！今捕まえてやる！」

ラベルタスはそう言って畳んであった黒い服を持ち外出しようとした時に創介達が現れる。

クラツガー「どこへ行くのかな？」

ラベルタス「あー…まあな……」

創介「ほい、ヘルメット。」

ラベルタス「どうも。……あ。」

ラバル「やつぱり！シャドウウインドなんだ！」

ラベルタス「何だって？ハハ…いや、どこにこんなもんが?」

エリス「貴方の秘密の部屋よ。」

ラベルタス「なに!?あの部屋で何をした!？」

クラツガー「あんたがシャドウウインドなんだろ?!」

ラベルタス「私が?そんな男の事は聞いた事も無いのに…いやもしくは女かもしれないが?」

ラベルタスは少し焦った様子でそう言う。

創介「じゃあ遠くで見えるあのレースの障害物は何ですか?ああ言う構造はレース好きにしか造らなそうだけど?」

ラベルタス「いやいや、何の証拠にもならないだろ?」

創介「じゃあその持っている服は何ですか?」

ラベルタス「このボロ切れの事か？……あ！」

ラベルタスが広げた服はシャドウウインドが着ていた服だった。

ウオリズ「それはシャドウウインドのスピードーズじゃねえか？」

ラベルタス「いや、シャドウウインドは今別のスピードーズに乗ってる。……あーいや、何の事だがさっぱりわからんな。私はシャドウウインドではなくアウトランドに住む平凡なライオンでたまたまお揃いのヘルメットを持ってただけ。」

エリス「服もね。」

ウオリズ「スピードーズもな。」

ウオリズはそう言って何かに覆い被さる赤い布を取るとシャドウウインドが使っていたスピードーズが現れた。

ラベルタス「おい！言っただろ？シャドウウインドはもうそれには乗っていない。私の新しいスピードーズ用にと部品を貰ったのさ。つまり、シャドウウインドのスピードーズ……いや……はあ……わかった。私とそのレーサーである可能性がある事は認めよう。君達言うつまり……シャドウウインドに。」

ラベルタスはそう言ってシャドウウインドのヘルメットを被った。

シャドウウインド「悪いが、シャドウウインドは本当の泥棒を探しに行かなければならない。君達が泥棒でない事はわかった。」

ラベルタスもとい、シャドウウインドはスピードーズに乗ろうとするが、

創介「ちよつと待て、俺達と協力しないのか？」

シャドウウインド「そうだ。」

創介「なら、俺と勝負しようぜ。」

シャドウウインド「なに？」

創介「一応、俺にはこの世界で言うスピードーズのようなマシンがあるからな。お前が勝ったら俺達は大人しくここから出ていく。俺が勝ったら俺達と協力する。それで良いかい？」

シャドウウインド「……良いだろう。その勝負、受けて立とう。」

シャドウウインドは創介の挑戦を了承し、ラベルタスが造ったレース場で創介とシャドウウインドのレースをすることになったのだが

…

ラベルタス「お前のそのマシンはなんでもありかよ!」

勝負はまさかの創介の圧勝だった。何故なら創介のバイクは神々によって造られた為飛行能力、水上走行、ブースト、そしてマリオカートで言うドリフトの機能などが搭載され、特に創介はブーストとマリオカートで言うドリフトを駆使してラベルタスを圧倒したのだ。

創介に負けたラベルタスは本当に創介達と協力してくれるようになりラベルタスと共にサソリ族のアジトへと向かった。

t o b e c o n t i n u e d ……